

宮の前遺跡

—桂川流域下水道西桂町下暮地発進基地建設に伴う発掘調査—

2003.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

宮の前遺跡

—桂川流域下水道西桂町下暮地発進基地建設に伴う発掘調査—

2003.3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序 文

本書は山梨県埋蔵文化財センターが平成14年度に発掘調査を実施した桂川流域下水道西桂町下暮地発信基地建設に伴う宮の前遺跡の発掘調査報告書であります。

遺跡は山梨県東部の南都留郡西桂町下暮地地区に所在し、忍野八海周辺を源として途中、相模川と名前を変え相模湾に下る桂川の左岸にその支流である柄杓流川や欄干川によって形成された段丘上に位置しております。この地域は縄文時代の集落遺跡が点在する所として古くから知られており、中でも寺野遺跡や城屋敷遺跡などの調査成果は県東部地域は言うに及ばず縄文時代研究に強い影響を与えたと言っても過言ではありません。こうした中、今回の宮の前遺跡の発掘調査では、縄文時代中期後半から後期初頭にかけての配石遺構や柄鏡型敷石住居、土坑などの貴重な遺構や遺物が発見されました。これらの資料を見てみると遺跡地が山梨県中西部地方と西関東周辺の中間地点に位置しているためか双方の影響が如実に現れているかのように思われます。果たしてこれらは如何なる意味を持っているのかを究明する事は非常に興味深い問題であると言えるでしょう。今後、この報告書の成果が多くの研究の一助になれば幸甚であると考えています。

末筆ではありますが、数々のご協力を賜りました西桂町教育委員会ほか関係各位、並びに発掘調査と整理作業に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

2003年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚 初重

例言・凡例

1. 本報告書は2002年度（平成14年度）に桂川流域下水道西桂町下暮地発信基地建設に伴い発掘調査された南都留郡西桂町宮の前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 宮の前遺跡は南都留郡西桂町下暮地720-1他に所在し、過去に1987年（昭和62年）と2001年（平成13年）の2回西桂町教育委員会により発掘調査が実施されており、今回で3回目の発掘調査となる。
3. 発掘調査は山梨県土木部の委託を受けて山梨県教育委員会が実施した。
4. 発掘調査および出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターで行い、齊藤伸・吉岡弘樹が担当した。なお、第2章を齊藤、第5章を保坂康夫・望月明彦、それ以外について吉岡が執筆した。
5. 本報告書の編集は吉岡が担当した。
6. 写真は、遺構・遺物ともに齊藤・吉岡が撮影した。
7. 黒曜石の産地推定にあたっては沼津工業高等専門学校物質工学科望月明彦先生のお手を煩わせた。
8. 発掘調査および整理作業においては、次の方々・機関にご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

西桂町教育委員会 大月市教育委員会
望月明彦（沼津工業高等専門学校） 小佐野保子（敬省略・順不同）
9. 本報告書の挿図等に関する指示は下記のとおりである。なお、主要な遺構・遺物の挿図縮尺は基本的に次のとおりであるが、資料などの大きさにより適宜、縮尺に変化を持たせてある。また、これ以外の遺物ドットマークなどの指示については図中に示してある。

遺構 住居跡：1／40 配石：1／30 土坑：1／40 埋設土器：1／15 燃土址：1／30
遺物 土器類および拓影：1／2・1／3 石器類：1／1・1／2・1／3
10. 表中の注記番号の記載については、調査年度・遺跡名を示す『02宮』が省略してある。
11. 本報告書に関わる出土品および記録図面・写真類などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序文

例言・凡例

第1章 調査の経緯と組織

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1

第2章 遺跡の概観

第1節 地理的環境	2
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	2

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査方法	4
第2節 基本層序	4

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 住居跡	7
第2節 配石遺構	7
第3節 土坑	7
第4節 埋設土器	18
第5節 焼土址	18

第5章 自然化学分析

第1節 西桂町宮の前遺跡での黒曜石産地分析	40
-----------------------	----

第6章 まとめ

第1節 柄鏡型敷石住居跡	44
第2節 配石遺構	44
第3節 火山灰の降下	45
第4節 泥流・溶岩流の流下	46

挿図目次

- 第1図 遺跡位置図
第2図 基本層序観察位置図
第3図 基本層序柱状図
第4図 調査範囲図
第5図 遺構配置図
第6図 住居跡
第7図 住居跡遺物分布状況
第8図 住居跡出土遺物 その1
第9図 住居跡出土遺物 その2
第10図 住居跡出土遺物 その3
第11図 配石遺構
第12図 配石遺構出土遺物
第13図 主要遺構（ポイント）配置図
第14図 土坑
第15図 土坑出土遺物 その1
第16図 土坑出土遺物 その2
第17図 土坑出土遺物 その3
第18図 第1号埋設土器
第19図 第1号埋設土器
第20図 第2号埋設土器
第21図 第2号埋設土器
第22図 焼土址
第23図 遺構外出土遺物 その1
第24図 遺構外出土遺物 その2
第25図 遺構外出土遺物 その3
第26図 遺構外出土遺物 その4
第27図 遺構外出土遺物 その5
第28図 遺構外出土遺物 その6
第29図 遺構外出土遺物 その7
第30図 遺構外出土遺物 その8
第31図 遺構外出土遺物 その9
第32図 遺構外出土遺物 その10
第33図 遺構外出土遺物 その11
第34図 昭和62年調査第1号住居跡および出土遺物
第35図 配石

写真目次

- 写真1 表土剥ぎ風景
写真2 調査風景
写真3 基本層序堆積状況

写真図版目次

- 写真1 発掘調査区域 他
写真2 調査対象地 住居跡 配石遺構 埋設土器 土坑
写真3 遺構出土遺物 遺構外出土遺物
写真4 遺構外出土遺物

表目次

- 表1 遺構計測表
表2 遺構出土遺物計測表 土器類 その1
表3 遺構出土遺物計測表 土器類 その2
表4 遺構出土遺物計測表 石器類
表5 遺構外出土遺物計測表 土器・土製品 その1
表6 遺構外出土遺物計測表 土器・土製品 その2
表7 遺構外出土遺物計測表 土器・土製品 その3
表8 遺構外出土遺物計測表 石器類

第1章 調査の経緯と組織

第1節 調査に至る経緯

山梨県の公共下水道は昭和29年に甲府市が初めて事業着手して以来約20年間停滞してきた。昭和50年度に富士北麓流域下水道の事業が着手されたのを皮切りとし、山梨県といくつかの市町村が共同で実施する下水道事業である県内4力所の流域下水道事業計画が相次いで立ち上げられた。この流域下水道とは、地方公共団体（市町村）が管理する下水道から排出される下水をうけて、これを排除し処理するために地方公共団体（原則として都道府県）が管理する下水道で、二つ以上の市町村の下水を排除し、処理場を有するものである。また、既存の行政区画にとらわれず、地形の条件から最も有利な地点に終末処理場を計画することができる事や、各市町村が個々に終末処理場を設置することに対し、終末処理場が集約されることから全体の建設費が軽減できる。さらには、流域内の各市町村の整備が流域下水道の建設にあわせて一体的に実施できるなどの利点があげられる。

この中の一つである桂川流域下水道は、平成5年度から相模川（桂川）流域管内の3市2町（都留市・富士吉田市・大月市・西桂町・上野原町）の区域を対象に事業に着手し、現在早期供用開始を目指し整備の推進を図っている途中である。宮の前遺跡のある西桂町は、この3市2町で構成されている桂川流域下水道処理区域になっている。

最初に宮の前遺跡が発掘調査されたのは1987年で、工場建設に伴って西桂町教育委員会の手により行われたものであった。この調査において住居跡内よりブリッジ部分にイノシシと推されるモチーフが付けられた釣手土器が出土し、宮の前遺跡を県東部有数の遺跡として有名にさせた。次に調査されたのは2001年でやはり工場建設に伴って今回の調査対象地の西側隣接地が調査されている。この調査では敷石住居跡、溝状造構などの成果をあげている。今回の調査は前述した桂川流域下水道西桂町下暮地発信基地建設によるもので昨年度2002年1月に試掘調査が実施され、それに基づいた協議の結果、同年5月より約20日間・506m²の調査期間・面積が設定された。

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 （山梨県埋蔵文化財センター 文化財主事）

齊藤 伸 吉岡弘樹

作業員および整理員 （山梨県埋蔵文化財センター短期間臨時職員・短期間非常勤嘱託職員）

天野亀一 天野きみ子 天野毅一 天野美津子 梅谷 鑿 加藤寿亀子 加藤由紀子

久保田裕美 佐々木さゆり 清水光子 鈴木八重子 鈴木 博 田代光男 田代久子

長沼三枝 西室智津子

第2章 遺跡の概観

第1節 地理的環境

宮の前遺跡の所在する西桂町は、山梨県の南東部（甲府地方の国中に対して『都内』と呼ばれる地域）のほぼ中央部に位置し、北と東は都留市に、西は河口湖町に、そして南は富士吉田市に接している。人口は約5,000人を数え、総面積は15.38 km²で約75%が山林である。町は北部に御坂山塊、西部に御正体山塊と二つの山塊に囲まれ、その中央部の富士山溶岩流上を、山中湖に源を発する桂川（相模川）が縦断している。西桂町の町名はこの桂川に由来し、桂川を中心とした平地部に市街地や農地が発達している。

町の歴史を振り返ると、古代甲斐国に置かれた巨摩郡・八代郡・山梨郡・都留郡の4郡の中では都留郡に属していた。さらに都留郡下には相模・古郡・都留・征茂・福地・多良・賀美の7郷があり、この中で西桂町は賀美郷に含まれていたと考えられている。郡名の『つる』の語源は、『つる』の音が鶴を連想させ、延命長寿の慶事に由来する郡名としたという考え方や、また富士北麓から桂川流域にかけての細長く伸びた平坦地が、まるで富士山から伸びた蔓のような形をしていたので『つる』と名付けたという仮説が立てられている。

明治8年(1875年)には町村合併が実施され、上暮地・下暮地・小沼・倉見・境・鹿留・夏狩・十日市場の8ヶ村が合併して桂村が誕生した。そして明治26年(1893年)に東桂・西桂に分村し、上暮地・下暮地・小沼・倉見が西桂村となった。その後昭和27年(1952年)の町制施行により西桂町が誕生したが、昭和35年(1960年)に上暮地と小沼の一部が富士吉田市に編入され、現在の西桂町の町域となった。

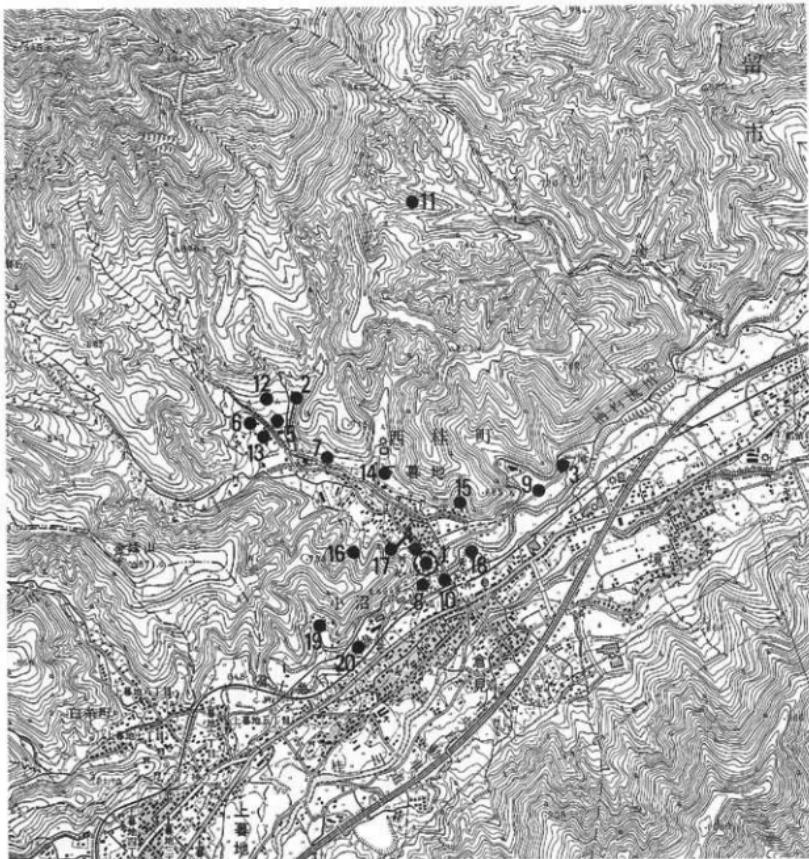
町の産業としては、1000年の歴史を誇ると地元でいわれている「郡内織」の生産地および集散の中心地として栄え、特に江戸時代には活況を呈した。その後第二次世界大戦後には化織・合織織へと転換し、地場産業として成長した。しかし最近は低迷し、それにかわり炭酸水素イオンを豊富に有し、ミネラル分の多い富士山からの伏流水をミネラルウォーターとして製造し、京浜地区を中心に全国に販売し好評を得ている。この西桂町下暮地720-1他に宮の前遺跡は所在し、標高は613.4mを測る。遺跡から北西を望むと開運山・御巣鷹山・木無山の3つの峰から成ることからそう呼ばれる標高1,786mの三ツ峠が聳えている。三ツ峠は、奈良時代に修験道の祖として有名な役小角によって修験道場として開かれたと伝えられ、江戸時代後期の天保3年(1832年)に入山した空胎上人が信仰の山として復興した。宮の前遺跡の所在する下暮地地区は三ツ峠の登山口にあたり、かつては登山道を中心に数多くの小祠が鎮座し、また現在でもこの空胎をはじめとする上人たちによって造立された石仏や石塔などが多数認められている。また三ツ峠山頂には、遺跡としては県内で最高所にある三ツ峠山山頂遺跡が所在し縄文時代の土器などが確認されている。現在の三ツ峠は往事の面影を残すとともに、ロッククライミングのメッカとして多くのクライマー・ハイカーたちによって賑わいをみせている。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境（第1図）

西桂町の遺跡は、倉見山の麓に展開し桂川左岸に位置する倉見地区、三ツ峠と倉見山の谷間に細長く立地する小沼地区、そして三ツ峠の南に伸びる尾根の谷間に立地する下暮地地区の三つの地域に存在している。三地区の中でも下暮地地区は南に開けた比較的温暖な地で、中野川・櫛干川・柄杓流川などの水利にも恵まれた良好な自然条件であったため、縄文時代や弥生時代などの古い遺跡が集中している。

ここでは本遺跡(1)も所在するこの下暮地地区の主要な遺跡を時代の古いものから順にふれていきたい。まず旧石器時代の遺物は寺野遺跡でポイント＝槍先形尖頭器が、そして休場遺跡でナイフ形石器が採取されている。この寺野遺跡や休場遺跡の立地する地域は、富士火山の泥流や火碎流などの自然災害を被る危険性が少なく、町内最古の人々は富士山の噴火の危険を避けてこの地区に足跡を残した可能性が高い。

縄文時代にはいると縄文早期は富士山の静穏期であり、また温暖化の影響もあり富士北麓でも遺跡が増加する傾向が見られる。西桂町のこの時代の代表的な遺跡としては、桂川の支流である一石川と仏の沢川が合流する段丘上に位置し、過去4回の発掘調査が行われた寺野遺跡(2)が名高い。寺野遺跡では縄文時代早期の堅穴住居址が発見され、特に西桂町で確認されている最古の縄文土器である早期初頭の燃糸文系土器が著名である。



第1図 遺跡位置図 ($S = 1/25,000$)

1 宮の前遺跡	2 寺野遺跡	3 下尾尻遺跡	4 宮の前遺跡
5 城屋敷遺跡	6 休場遺跡	7 大竹遺跡	8 上の海戸遺跡
9 尾尻遺跡	10 溝上遺跡	11 論所遺跡	12 後の神遺跡
13 柿野遺跡	14 宮作遺跡	15 矢花遺跡	16 四ツ入遺跡
17 宮の下遺跡	18 開途遺跡	19 渥入遺跡	20 中野遺跡

縄文時代も中期にはいると全国各地で遺跡が急増し、その規模も大型化する時期を迎える。西桂町でも柄杓流川と一石川が合流する地点に位置する下尾尻遺跡(3)から、縄文時代中期中葉の藤内式土器の破片や配石造構が確認された。しかしながらこの時期の西桂町の遺跡を代表するものは、昭和62年(1987年)に町教育委員会が発掘調査を実施した宮の前遺跡(4)である。宮の前遺跡は今回の調査地点から北西に100m離れた地点の柄杓流川の左岸段丘上に立地し、縄文時代中期後葉曾利Ⅱ～IV式期の竪穴住居址4軒と同時期末葉の敷石住居址1軒が確認されている。また郡内地域では唯一の完形品である釣手土器が、器高約70cmの逆位に設置された大型埋甕とともに発見されたことは全国的に有名である。この地中に上器を埋設した埋甕は本遺跡でも確認されているが、

幼児の埋葬施設や胎盤収納施設であるなどの諸説がある。水の木川と一石川に挟まれ、寺野遺跡の下方300mの地点に立地する城屋敷遺跡(5)からは、土坑1基と小堅穴状遺構5基が検出された。この小堅穴状遺構からは縄文時代後期後葉から晩期前半期の清水天王山式の土器群が出土している。この城屋敷遺跡の200m西方には、縄文時代早・前・晩期の土器片や石匙を出した休場遺跡(6)も所在している。

弥生時代の遺跡としては、中期の条痕文系土器を出土した大竹遺跡(7)や上の海戸遺跡(8)があげられる。また口縁部に指頭圧痕をもつ太い突帯が2条、条痕文が施された壺形土器の破片が発見されている尾尻遺跡(9)も存在する。

西桂町では現在までのところ、この弥生時代中期から平安時代に至るまでの遺物は検出されていない。しかし平安時代に入ると西桂町でも遺跡数が急増し、開発がこの時代に一気に進んだものと考えられている。溝上遺跡(10)では、この平安時代の堅穴住居址や土師器・須恵器が出土し遺跡の周辺では規模の大きな集落が営まれていた可能性も指摘されている。

【引用・参考文献】

『西桂町誌』 西桂町誌編さん委員会 1999



写真1 表土剥ぎ風景



写真2 調査風景

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査方法

平成14年1月17・18日に実施された試掘調査によって調査対象地(506m²)は宮の前遺跡の東端部に当たると想定され、縄文時代中期後半から後期初頭を主体とした集落が展開されることが予測された。この結果から、関係機関との協議により約20日間の本調査が計画された。

本調査は遺構検出面まで油圧シャベルによって土砂を平坦に剥ぎ、その後は人力による掘り下げ・精査を実施し遺構検出に努めた。グリッドは4mの設定とし、西から東にABC... 北から南に1 2 3... と番号を振り分けた。

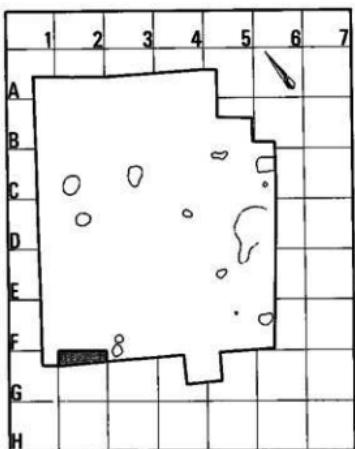
なお、調査中は山梨県埋蔵文化財センター安全衛生基準に遵守し危険防止等に努めたことを付け加えておく。

第2節 基本層序（第2・3図）

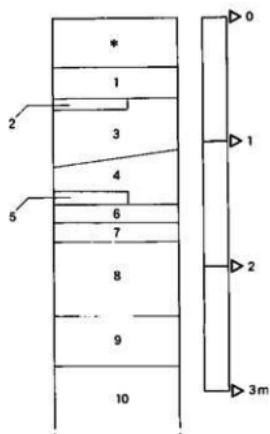
本遺跡においては、ほぼ全体で同一の層序が確認できた。そこで遺構や近隣に影響を与えない箇所としてG-2区を選び深掘りを実施し、その層序を観察した。資材置き場・駐車場として使用されていた時に搬入された約40cm厚の碎石層の下、元水田経営されていた時期の耕作土が25cmの厚さで堆積している。3層上面では弥生時代に降下したと推されるスコリア層が認められる。3・4層と遺物包含層があり、その下部6~8層に無遺物層が存在する。9・10層では若干の遺物出土がみられるものの遺構等の確認は出来なかった。



写真3 基本層序堆積状況



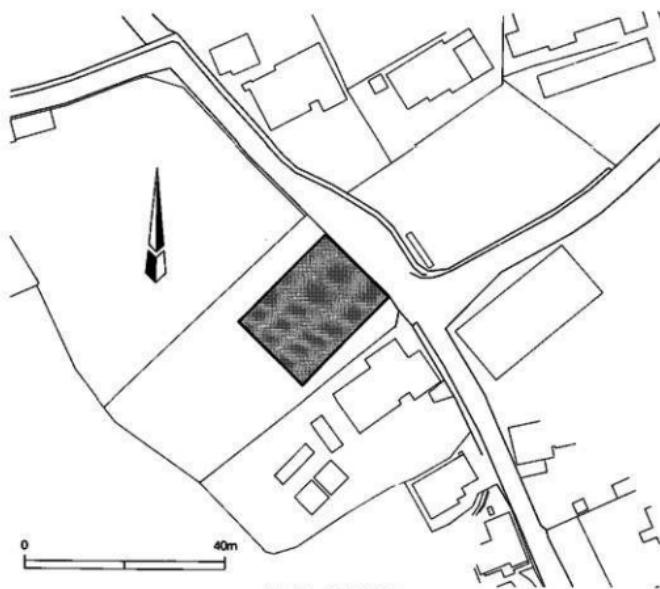
第2図 基本層序観察位置図



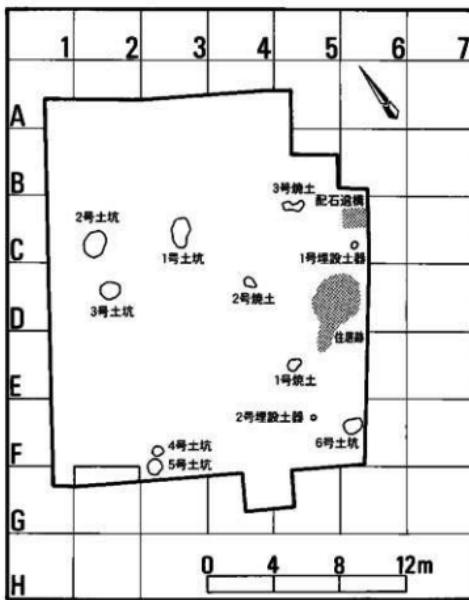
第3図 基本層序柱状図

* 表土層【砕石層】

- 1層. 黄褐色砂質土層 旧水田の耕作土層。
- 2層. スコリア層 1mm程の同一サイズ。弥生時代に降下したものと考えられる。
- 3層. 淡茶褐色土層 粘性・しまり共にやや強い。1~10mmのスコリアを多く混入する。
- 4層. 明茶褐色土層 僅かながら縄文時代中期後半代の異物の混入を見る。
- 5層. スコリア層 粘性・しまり共にやや強い。1~10mmのスコリアが微量に混入される。縄文時代中期後半代の遺物が多く混入する。
- 6層. 明茶褐色土層 3~10mmの大きさを主体としたスコリア層。縄文時代中期後半曾利Ⅲ式期以降に降下したものとされる。
- 7層. 淡黄褐色砂質土層 粘性・しまり共に強い。僅かに2~3mmのスコリア・炭化粒子を含む。また、10~40mmの円礫・溶岩片の混入も見られる。
- 8層. 暗黄褐色砂質土層 粘性・しまり共に非常に強い。極少量のスコリア・炭化粒子（いずれも1~2mm程度）を含む。
- 9層. 黄茶褐色土層 粘性・しまり共に8層と同じ。2~3mmのスコリアが多く散る。
- 10層. 暗黄茶褐色土層 やや砂質気味のためか粘性が弱い。しまりは強い。10cm~人頭大の溶岩礫が所々にみられる。



第4図 調査範囲図



第5図
遺構配置図

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 住居跡（第6～10図）

今回の調査では柄鏡型敷石住居が1軒、D-5・6、E-5区に跨って検出された。主軸は大まかに南北方向に求められる（W-23°-S）。残存状況は必ずしも良好なものとは言えない。入口部は完全に検出されたものの居住部については櫛干川方向である東側が欠損しており、ほぼ1/2が残存していたに過ぎなかった。壁部は搅乱・削平等の影響から確認は出来ず、このため図示し得る遺物類の出土も非常に少なかった。

入口部は偏平な自然石を敷いてその周囲を直径約15cmの自然石をもって取り囲んでいる。いわゆる石棺状の造りとは違うが、その組み合わせ方は緻密である。法量はおおよそ長軸90cm・短軸65cmを測る。入口部と居住部は現存約25cmの間仕切り石によって区画が別にされている。

居住部は部分的に縁石が検出されている。長軸の復元は現段階では難しい。短軸は2.62mを測る。平面形は残存部分から推定すると楕円形状を取るものと思われる。敷石は縁辺部分および奥側に配されている。また、敷石のない部分については転圧された痕跡はあまり認められず住居廃絶時に剥ぎ取られ持ち出された可能性も捨て切れない。敷石のサイズには統一感は感じられない。しかしながら主として偏平な自然石を使用している共通点がある。炉は検出時の状況から、本来は居住部ほぼ中央に炉石を持つ石囲い炉であったが、住居廃絶時に破壊され炉石は抜き取られたものと推測される。柱穴は主、補助ともに検出されなかった。

遺物の検出は前述のとおり少なく、土器のほとんどが破片資料である。1は曾利IV式期、2は曾利IV式期新段階、3～6は曾利V式期、7～10は加曾利E式期、11は加曾利B式期にそれぞれ比定されるものである。また、石器類（1～10）は全て磨石である。

第2節 配石遺構（第11・12図）

柄鏡型敷石住居の北東側、約3mのC-6区より検出された。しかし、敷石住居とは若干の時期差があるため同一時期に存在していたということは考えられない。

本配石遺構は現況ではコの字状を呈した0.96×0.68mの規模を持つ平面形をみせるが、その大部分は調査区外にあり、全容は掴めない。石材は長辺にはおおよそ20～25cmの選別されたとみられる扁平な自然石を使用し、短辺には19×46cmの細長のやはり自然石が設置され、それぞれの長軸を結合させてコの字形を作り出している。本来は全てが結合していたと想定できるが検出時においては敷石の欠落が認められた。高低差は約10cmであり、これから平面的な展開がイメージされる。平均海拔高度は約613.300mを測る。出土遺物は土器片が数点出土している。それらは縄文時代後期初頭の称名寺式期に比定されるものである。また、近接した位置に同時期の埋設土器（第1号埋設土器）が検出されているが、当配石遺構の付属設備なのか直接の関わりは現段階では判断しかねる。

土器類は1・2は縄文時代中期末から後期、3・4は称名寺I式期古段階に帰属するものと思われる。また、石器類（1・2）はともに磨石である。

第3節 土坑（第14～17図）

今回の調査では調査区の北側（第1～3号）、南西側（第4・5号）および東南側（第6号）の合計6基の土坑が検出された。

第1号土坑

C-3区より検出されたものである。不正楕円形状の平面形を示すが2基の土坑が結合した可能性も捨てきれない。各部の法量は長径1.68m・短径1.23m・最大深度0.61mを測る。坑内からは円礫の他、数点の土器片が出土している。

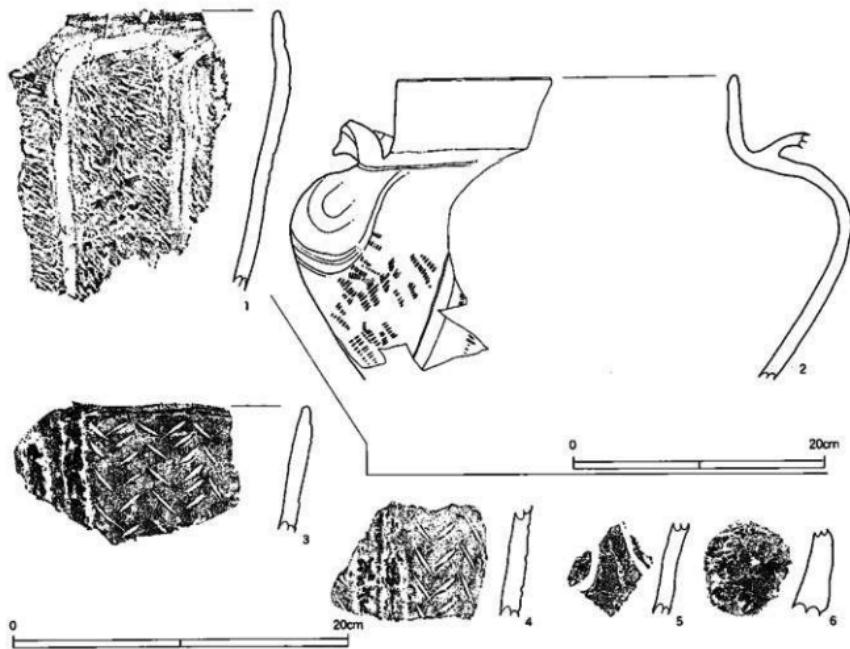
土器類は2は曾利IV式期、3～6は曾利V式期、7は加曾利E式期、1は加曾利E3式期にそれぞれ比定される。石器類としては磨石が2点（1・2）が出土している。



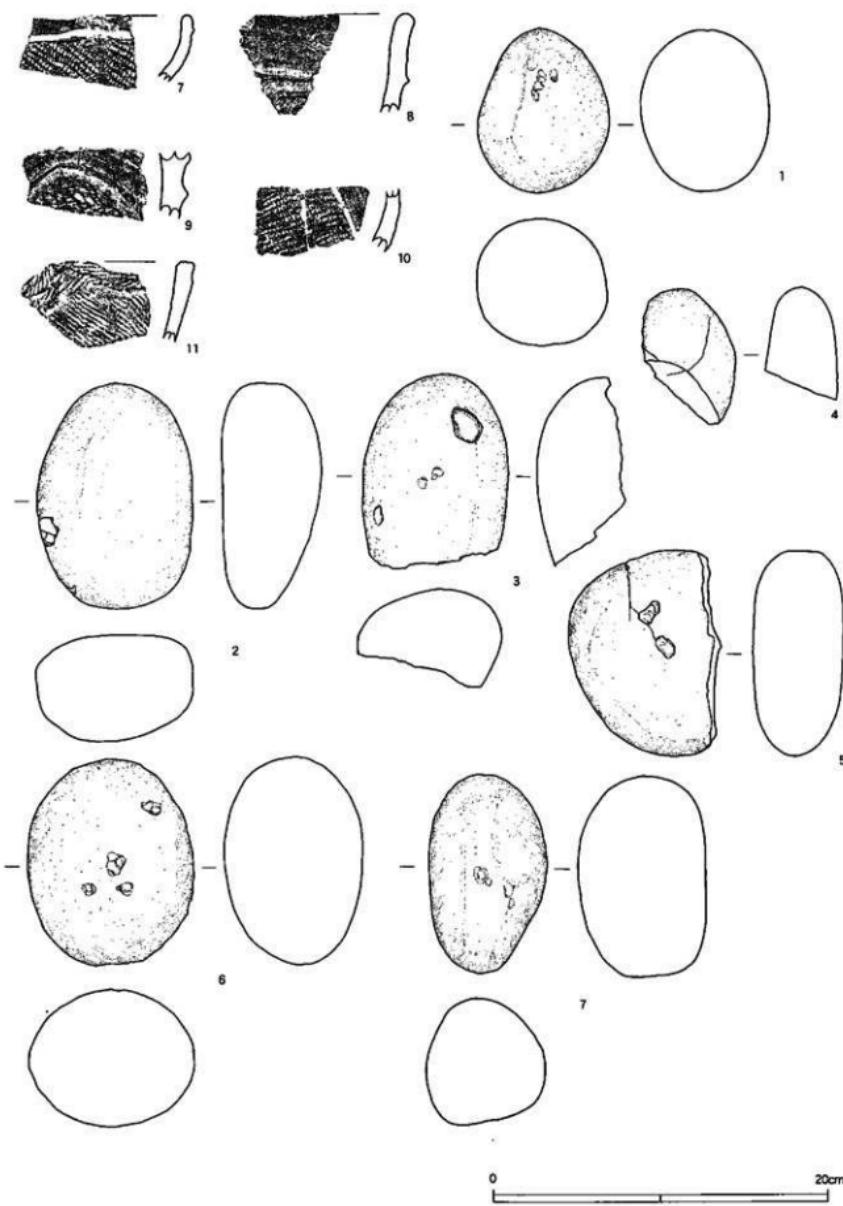
第6図 住居跡



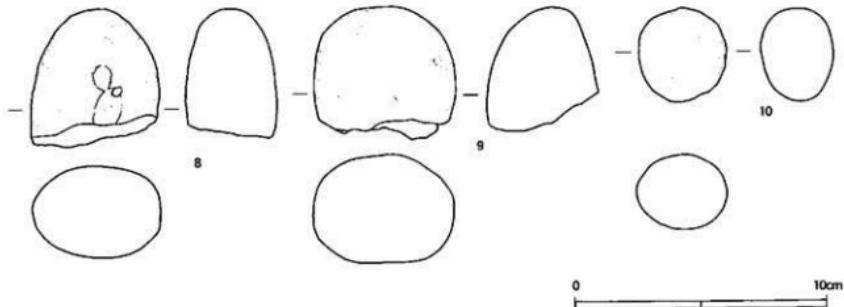
第7図
住居跡遺物分布状況



第8図 住居跡出土遺物 その1



第9図 住居跡出土遺物 その2



第10図 住居跡出土遺物 その3

第2号土坑

第1号土坑の北西約4m、C-2区から検出された。不正円形状の平面形態を有する。各部の法量は、長径1.65m・短径1.26m・最大深度0.37mを測る。坑底の形状はほぼ平坦で壁はやや急傾斜を持って立ち上がっている。坑内からは礫の他、数点の土器片が出土している。

土器類は1は曾利IV式期、2~5は曾利V式期、6は加曾利E4式期に比定される。石器類は磨石（1~3）が出土している。

第3号土坑

D-2区より検出されたもので第2号土坑から北西方向に約1.5mの位置にある。不正円形状の平面形態を有する。各部の法量は、長径1.21m・短径1.13m・最大深度0.425mを測る。坑底の形状はほぼ平坦で壁は緩やかな傾斜を持って立ち上がっている。坑内から出土している土器類は全て曾利式期に帰属されるものであり1はIV期、2~6はV期に比定されよう。また、石器（1）は磨石が1点検出されている。

第4号土坑

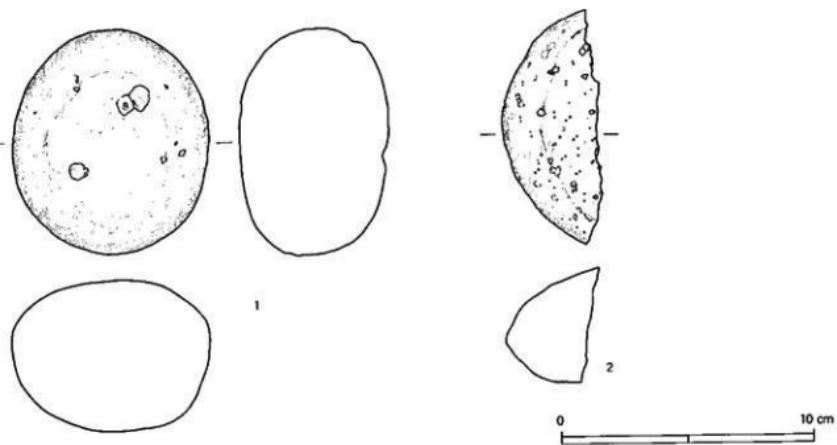
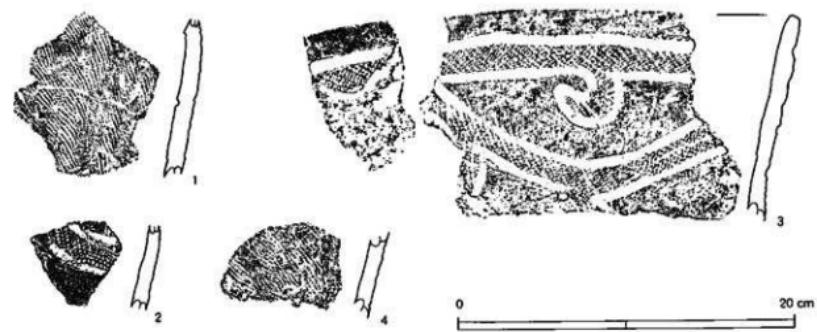
F-3区に位置し第5号土坑と近接した関係にある。平面形は不正橿円形状を取る。また、当土坑の特徴として南西部にテラス状の平坦面を有していることがあげられよう。壁はテラス部分ではなだらかに、他所ではやや急傾斜を持って立ち上がる傾向をみせている。規模は長径0.82m・短径0.72m・最大深度0.30mを測る。また、テラス部分では約0.13mの平均深度を持つ。坑内からの遺物は数点の小礫・土器片が検出された。土器類は1が諸磯B式期、2・3が曾利IV式期、4・5は加曾利E4式期、6は称名寺I式期古段階にそれぞれ位置付けられるものである。石器（1~5）は磨石・丸石類が出土している。

第5号土坑

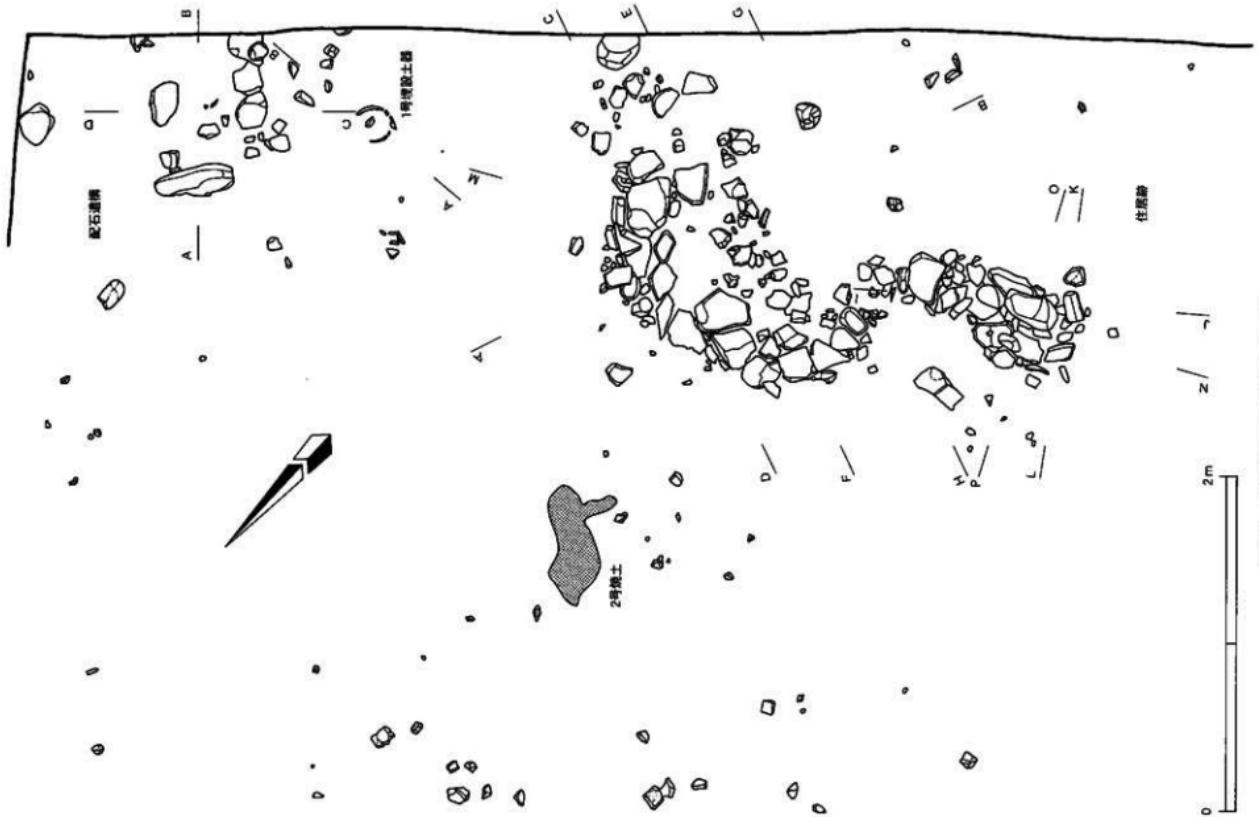
F・G-2区に跨った位置にあり第4号土坑と近接している。正円に近い形態を示す。その規模は長径0.78m・短径0.74m・最大深度0.20mを測る。坑底部分は平坦ではなく、北東方向に僅かに上がる傾斜を持つ。壁は緩やかに立ち上がっている。坑内からは五領ヶ台式期の土器小破片が検出されたが、図示し得るものではない。



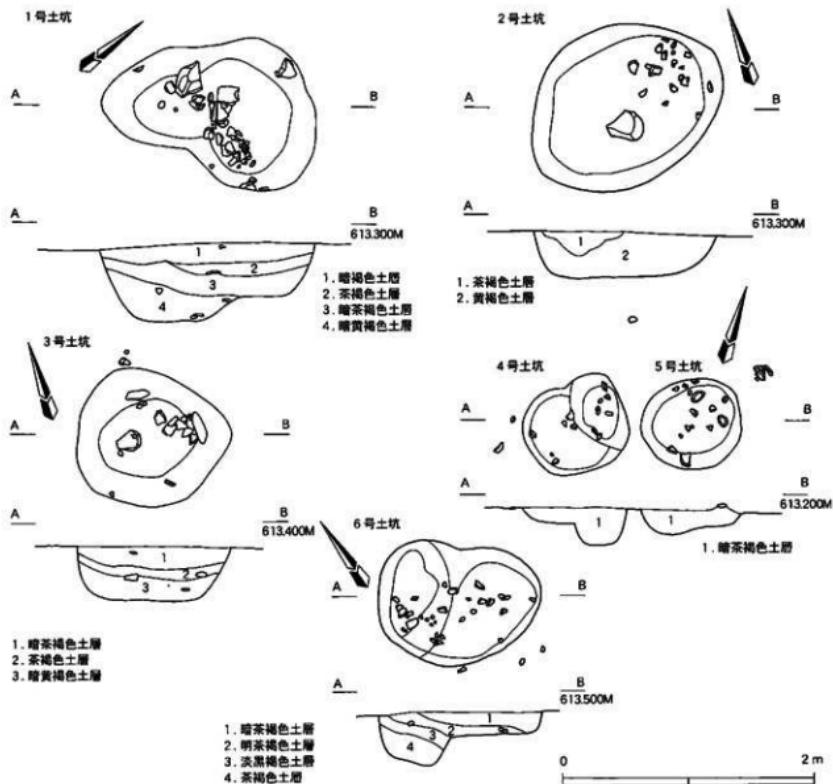
第11図 配石遺構



第12図 配石造構出土遺物



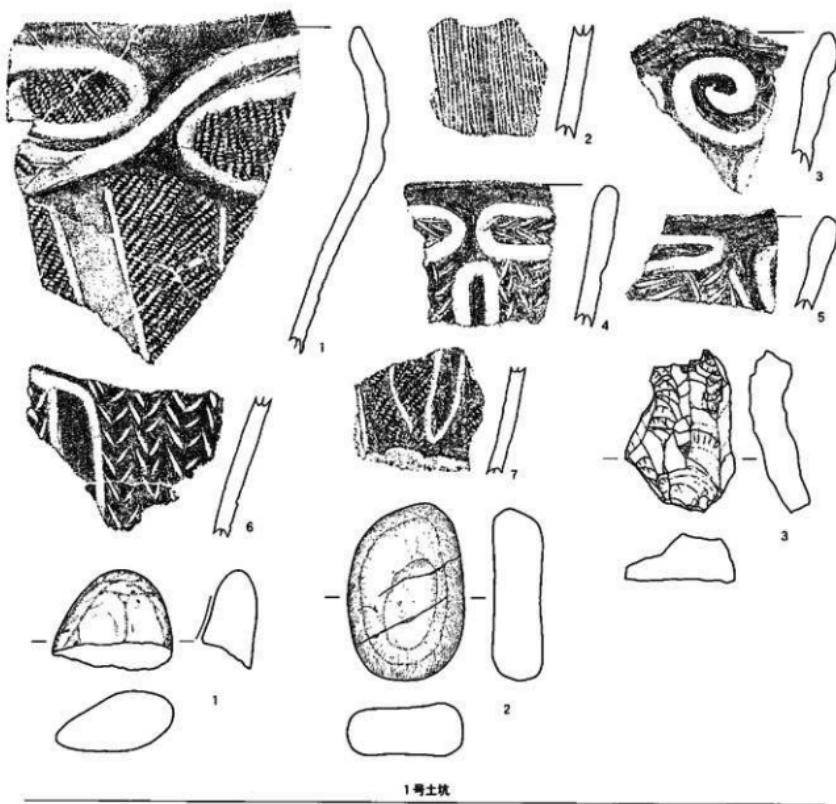
第13図 主要遺構（ポイント）配置図



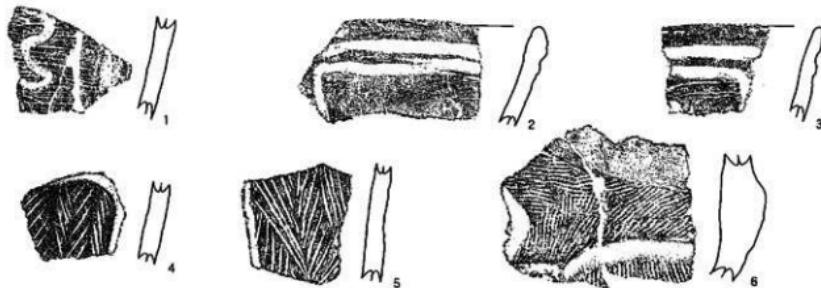
第14図 土坑

第6号土坑

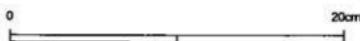
F-6区より検出された。平面形は不正梢円形状を示す。また、北東部分にテラス状の平坦面を持つ特徴があり、平均深度は約0.18mを測る。その他の法量は、長径1.28m・短径0.94m・最大深度0.435mを測る。壁は全体的に急傾斜を持って立ち上がる傾向をみせる。また、坑内からの遺物は数点の小穀・土器片が検出された。土器は1が曾利II式期、2は曾利IV式期、3・4は加曾利E4式期、5・6は称名寺式期に位置付けられるものである。石器は磨石（1）が1点検出されたのみである。



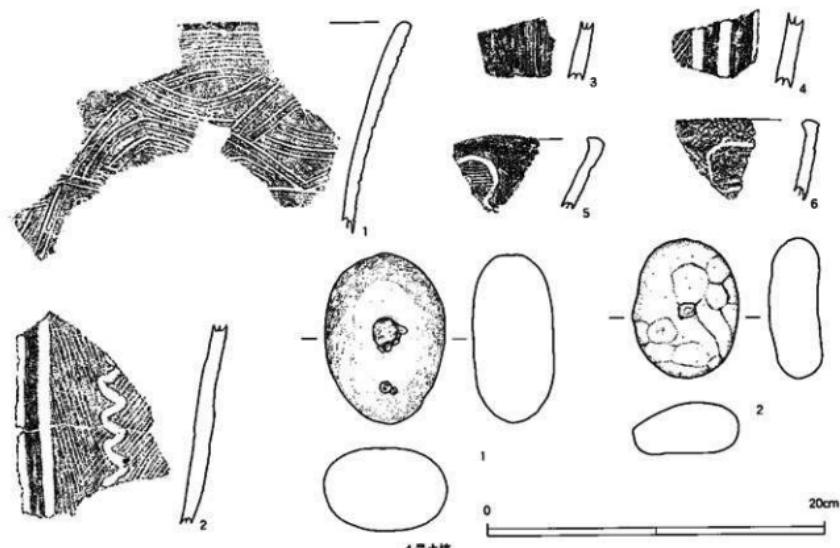
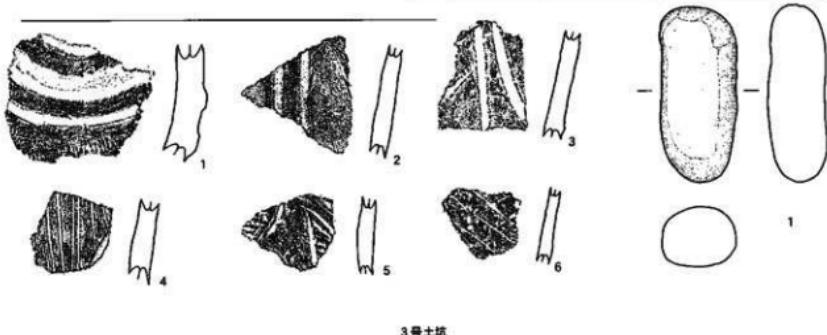
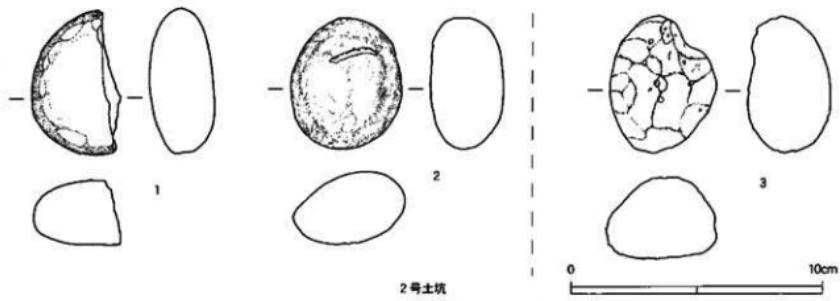
1号土坑



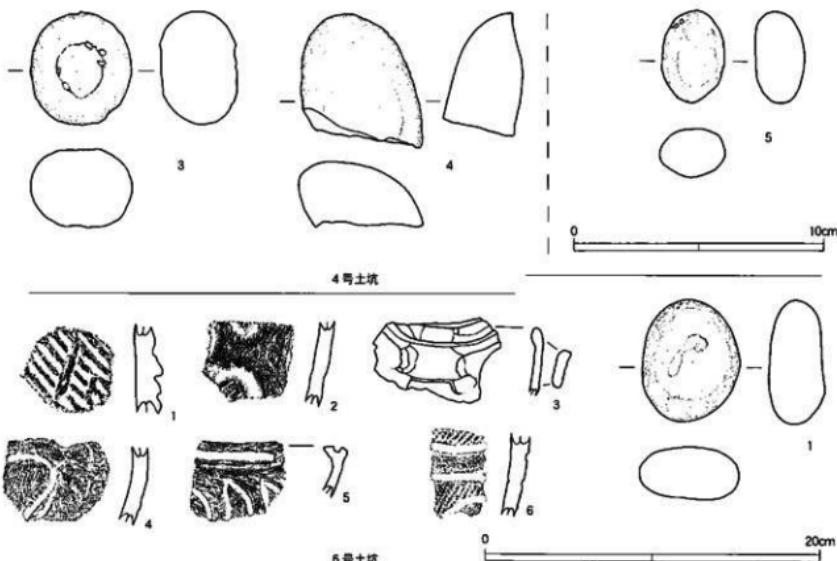
2号土坑



第15図 土坑出土遺物 その1



第16図 土坑出土遺物 その2



第17図 土坑出土遺物 その3

第4節 埋設土器

第1号埋設土器 (第18・19図)

調査区北東部のC-6区において検出された。配石造構の南方約0.4mと近接した位置にある。おおよそ直径37cm・最大深度32cmの規模を測る大型の掘り込みを持つ。平面形は、ほぼ正円形を呈している。土器(1)は掘り込み中央に正位で口縁の一部を欠き、さらに底部に穿孔された形で設置されていた。また、土器の内部上方からは挙大事の櫛が1点検出された。土器の時期は縄文時代後期初頭の稱名寺式期に位置付けられるものである。

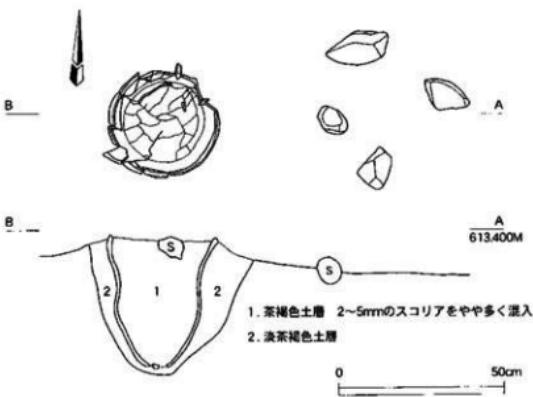
第2号埋設土器 (第20・21図)

調査区南側F-5区から検出された。同一大切内には他の造構は無く、F-6区に第6号土坑があるのみであり、単独で設置された可能性が強いものである。直径は約30cm、深度は約14cmと浅い。平面形は、ほぼ正円形を示す。土器(1)は掘り込みに正位置で体部上半のみを設置している。内部からは櫛の検出はなかったものの土器小破片が若干出土している。これは埋設土器本体口縁の欠損部分が内部に欠落したものである。土器の時期については縄文時代中期後半の曾利IV式期に位置付けられるものであろう。

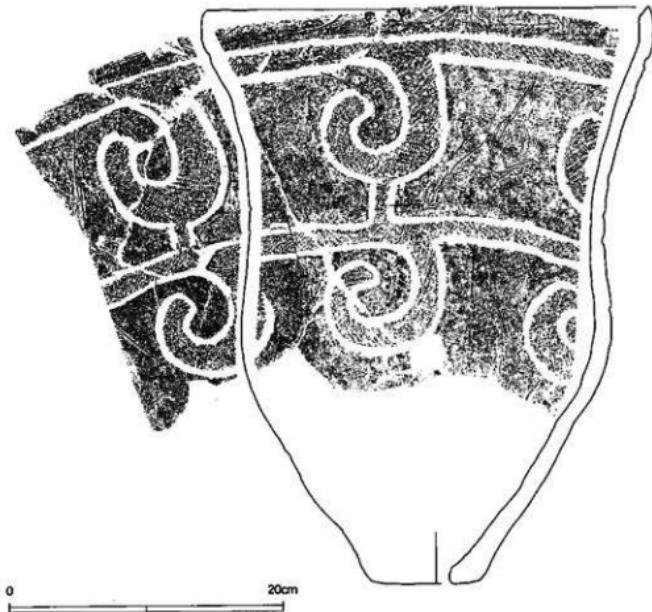
第5節 焼土址 (第22図)

第1号焼土址

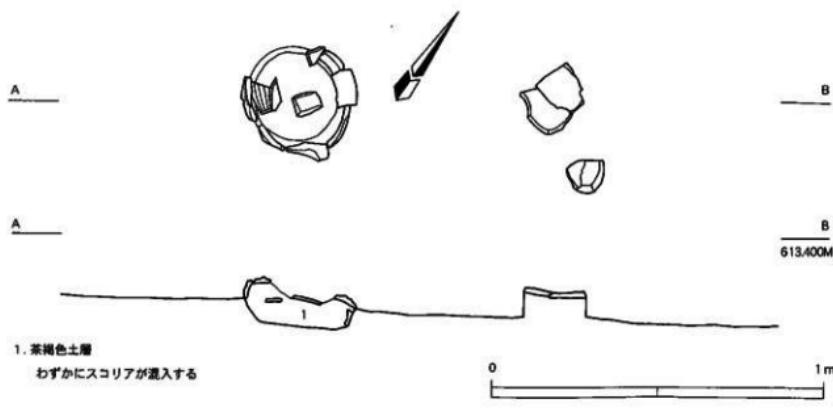
E-5区より検出された。約70×52cmの規模を有する。また、深度は約16cmを測る。平面形は不正円形を呈する。内部からは小櫛が1点検出されたほか土器・石器類の出土は無かった。なお、時期については層位などから縄文時代中期後半から後期初頭と幅を持たせておきたい。



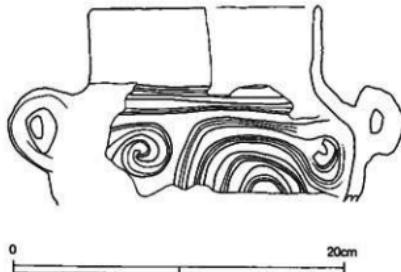
第18図 第1号埋設土器



第19図 第1号埋設土器



第20図 第2号埋設土器



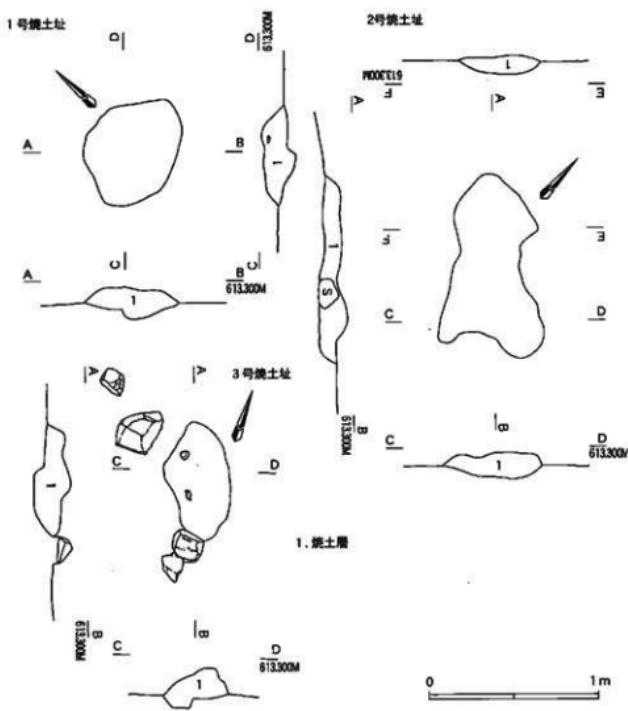
第21図 第2号埋設土器

第2号焼土址

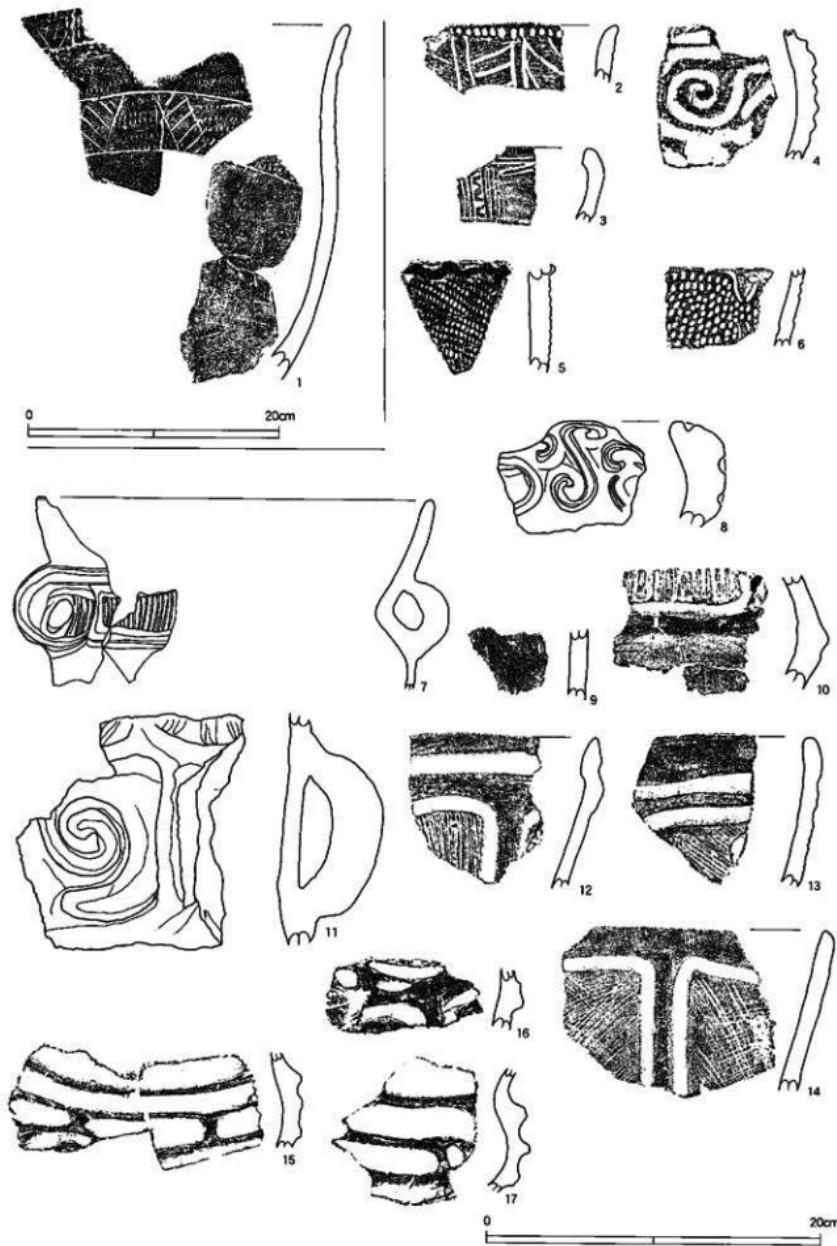
C-5区より検出された。110×35cmの規模を持ち平面形は不正形に広がる。深度は最大15cmと浅い。内部からの遺物の出土はなかった。時期については層位などから縄文時代中期後半から後期初頭と幅を持たせておきたい。

第3号焼土址

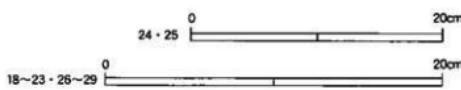
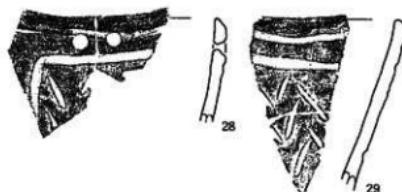
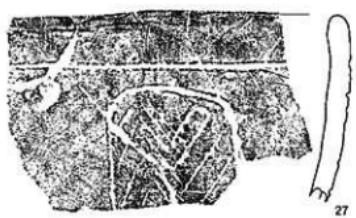
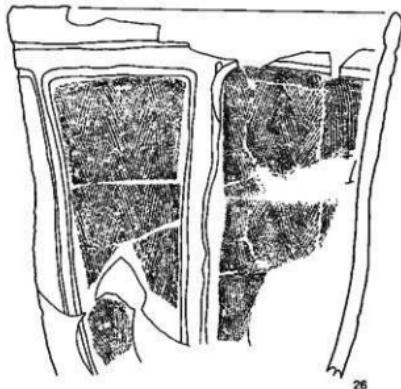
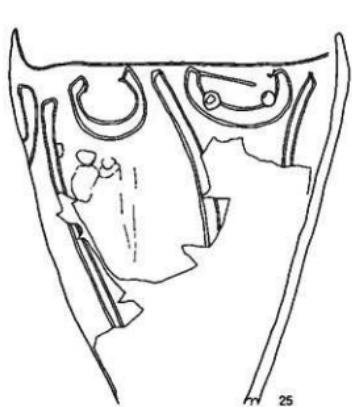
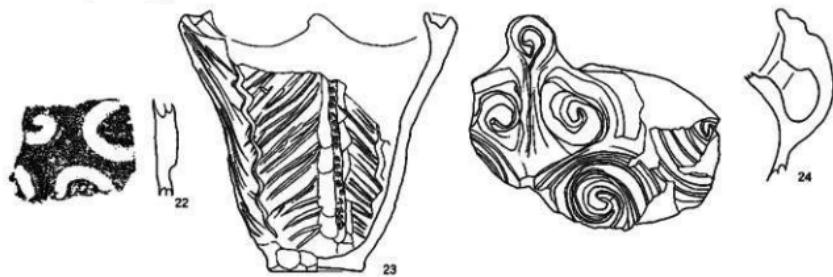
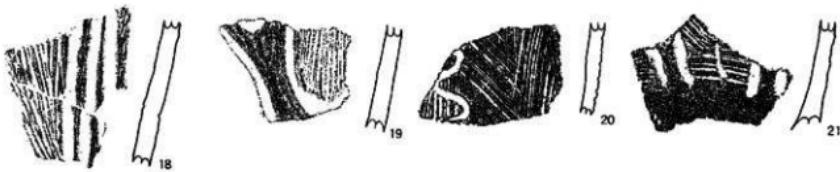
D-4区より検出された。70×39cmの不正長椭円形を呈している。深度は約23cmを測る。周囲にいくつかの礫が検出されたが、直接、当焼土址に関係する可能性は少ないものと思われる。なお、内部からの遺物の出土はなかった。時期については現段階では層位などから縄文時代中期後半から後期初頭としておきたい。



第22図 燒土址



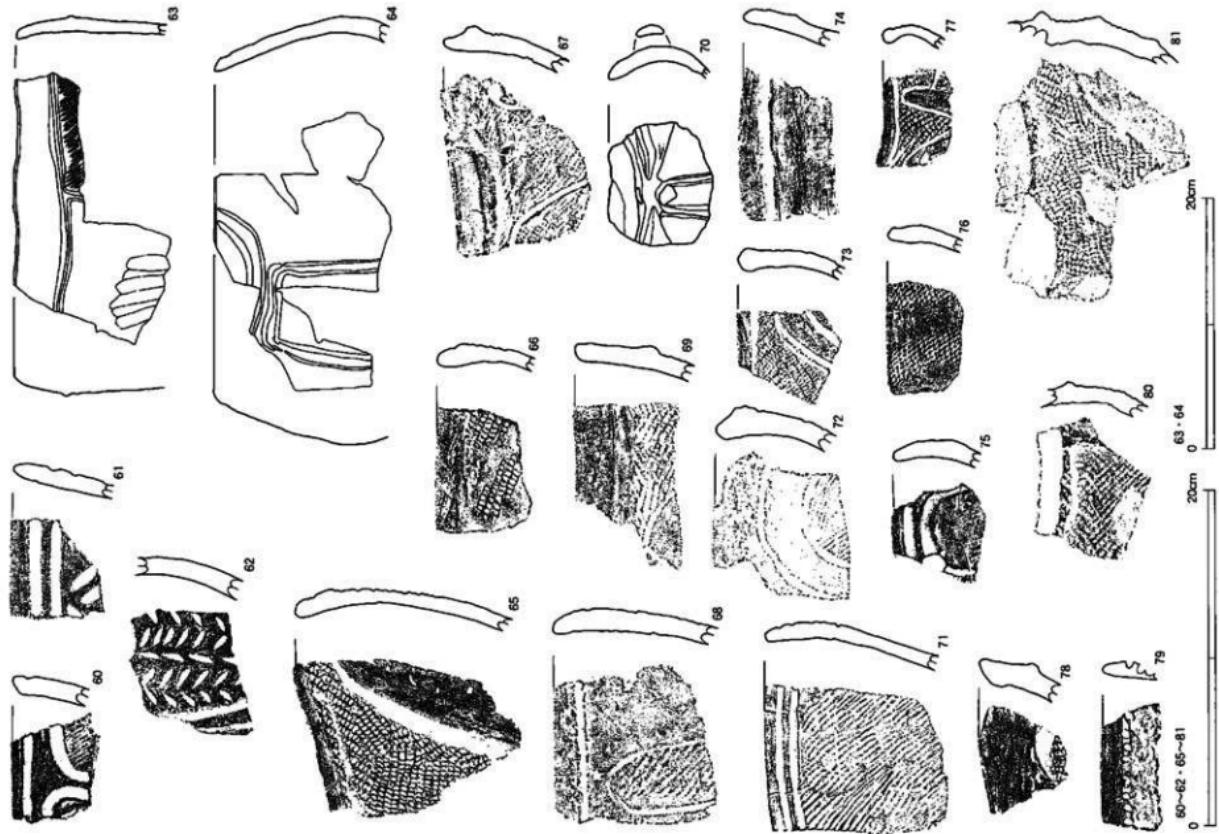
第23図 遺構外出土遺物 その1



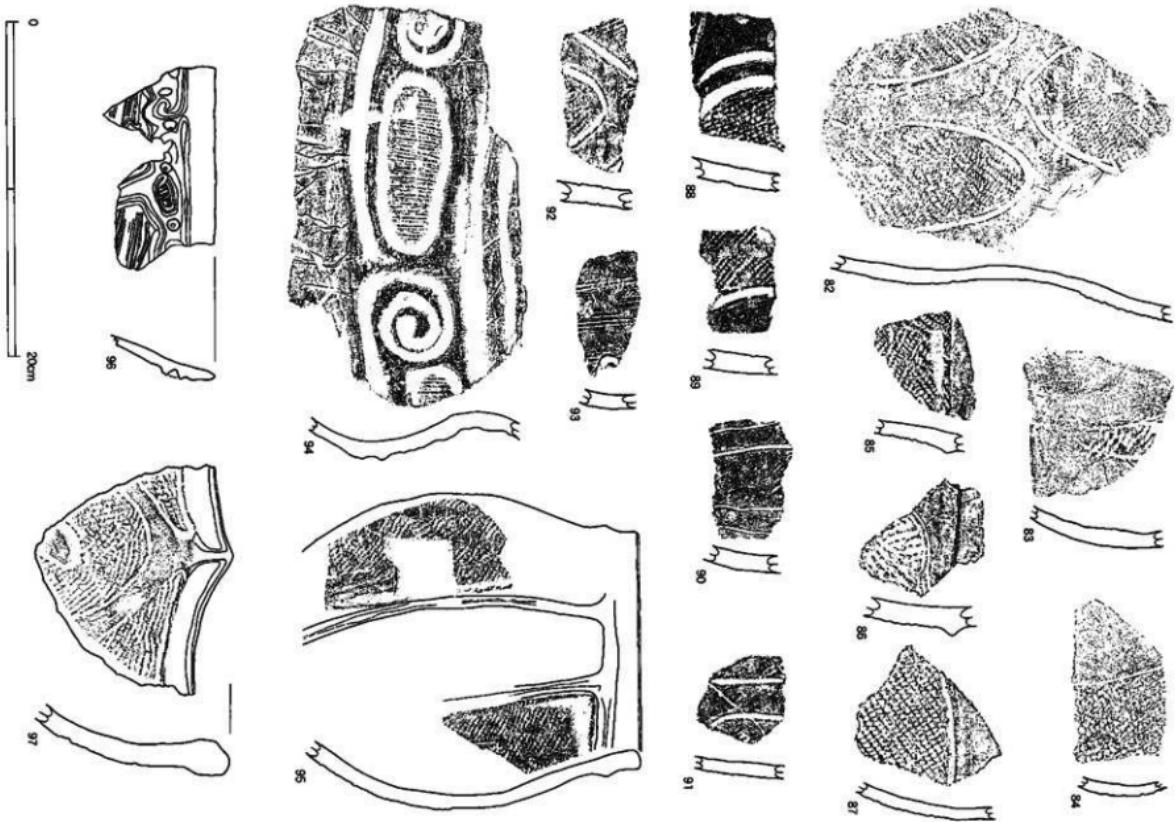
第24図 遺構外出土遺物 その2



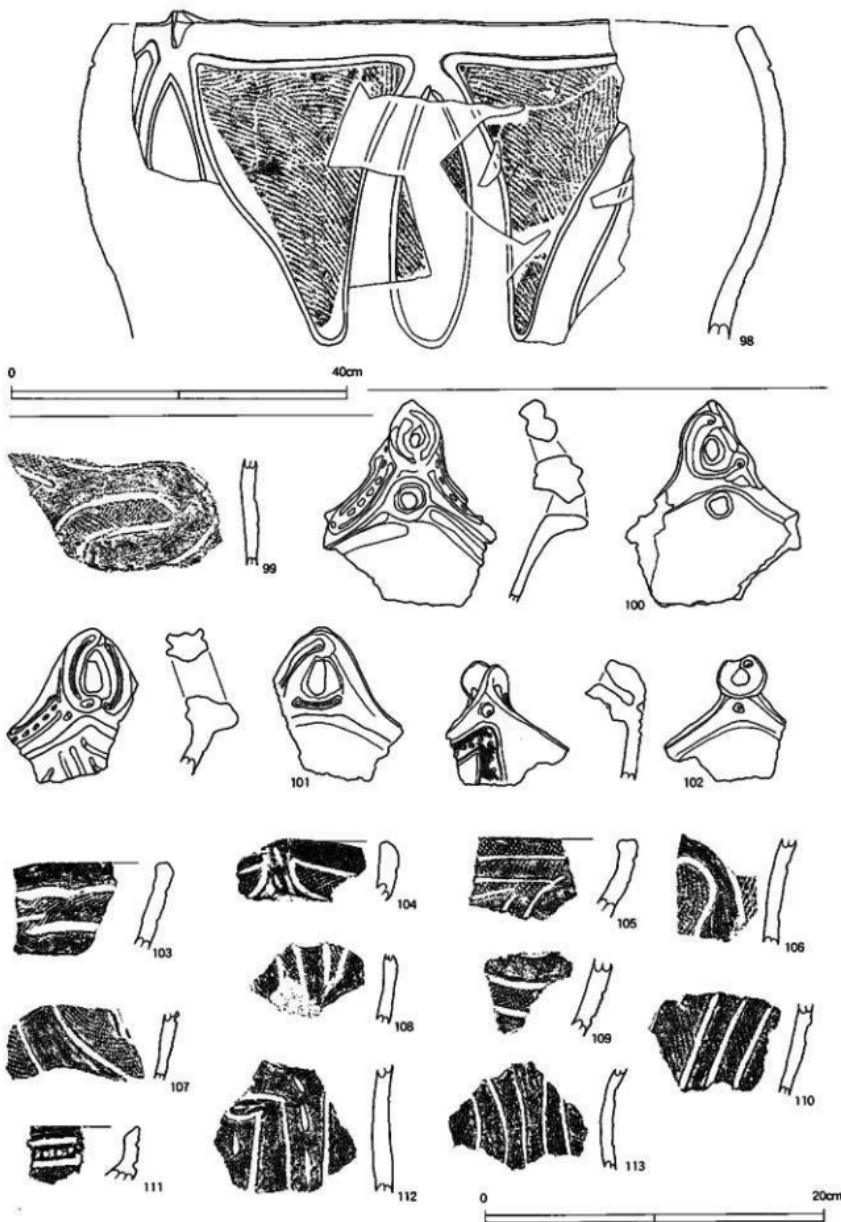
第25図 遺構外出土遺物 その3



第26圖 遺物外出土遺物 七〇四



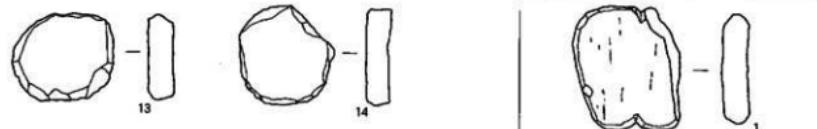
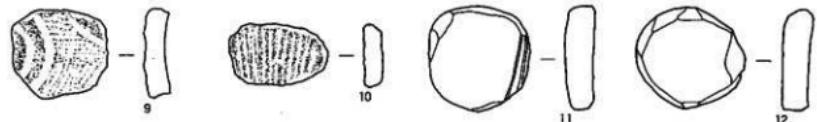
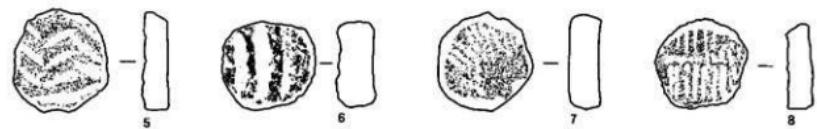
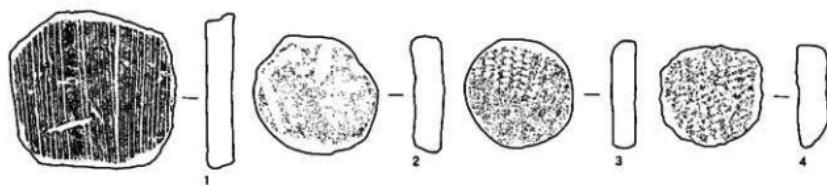
第27回 通構外出土遺物 その5



第28図 遺構外出土遺物 その6

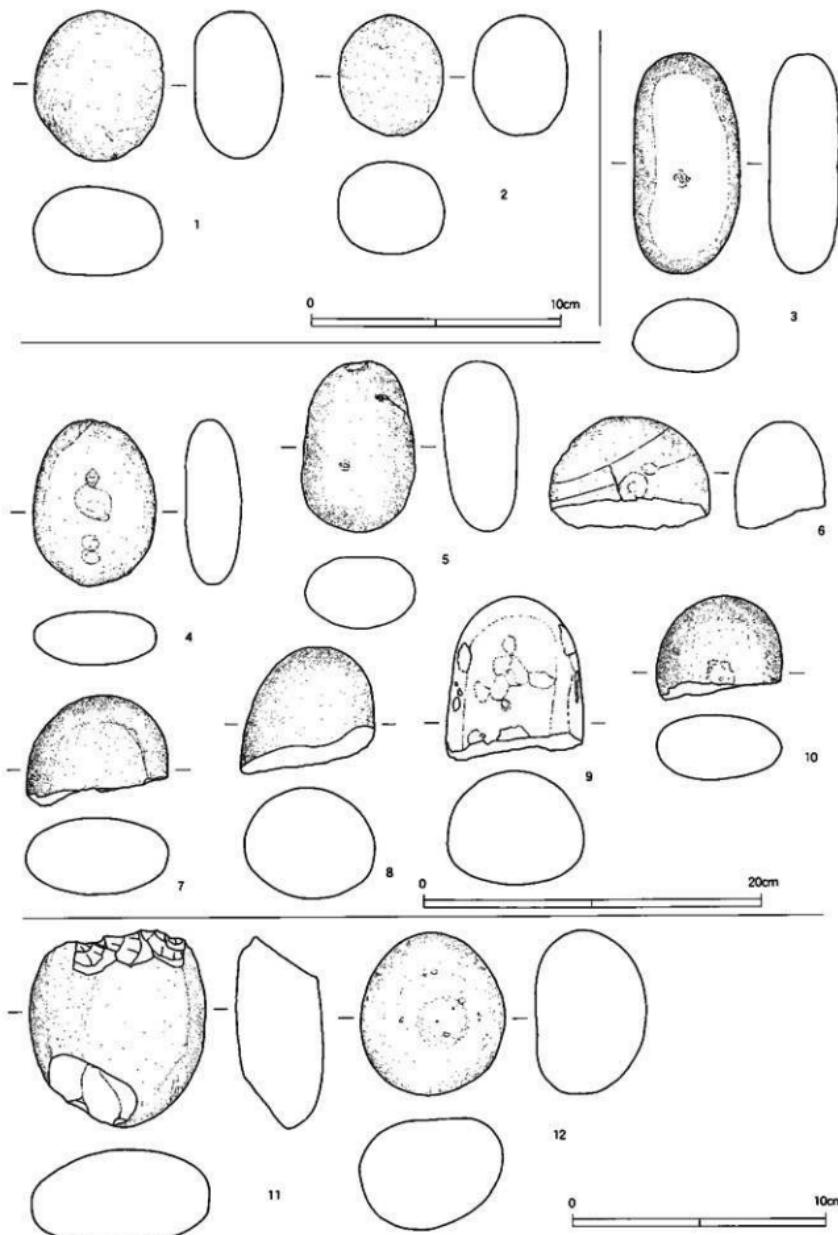


0 20cm

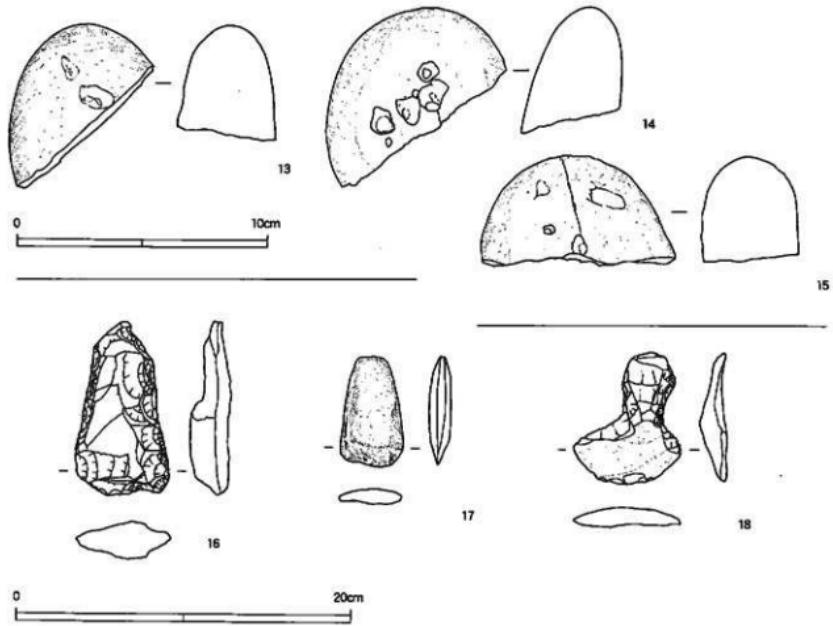


0 10cm

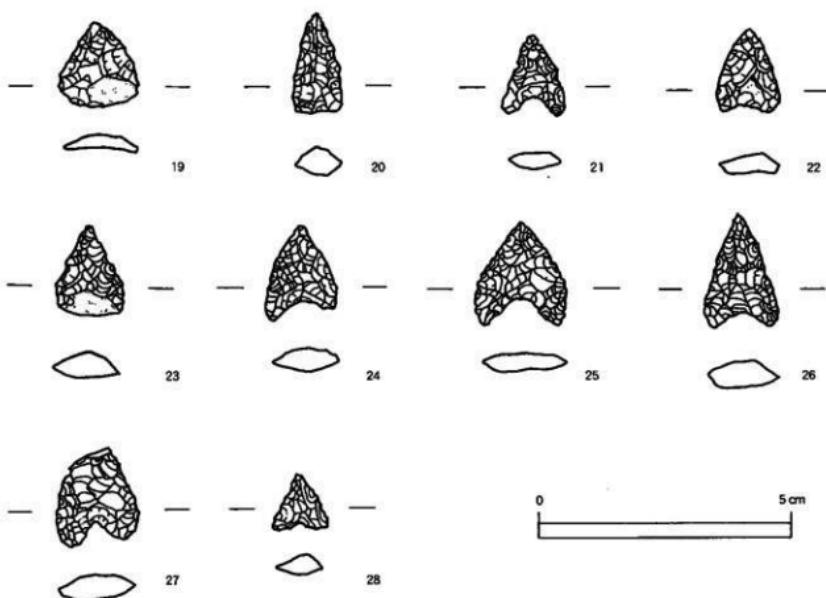
第29図 遺構外出土遺物 その7



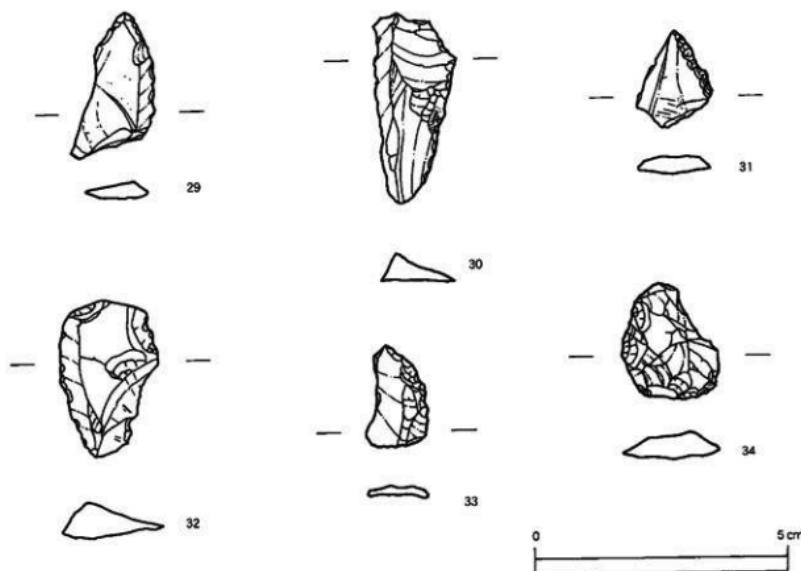
第30図 遺構外出土遺物 その8



第31図 造構外出土遺物 その9



第32図 遺構外出土遺物 その10



第33図 遺構外出土遺物 その11

表 1 遺構計測表

住居跡		m			
No	位置	長径	短径	主軸方位	床面平均高度
1	D-5・6 E-5	3.520	—	W-23°-S	613.270

配石遺構		m			
No	位置	長径	短径	主軸方位	床面平均高度
1	C-6	0.960	0.680	W-45.5°-W	613.300

工具		m			
No	位置	長径	短径	深度	平面形
1	C-3	1.680	1.230	0.610	不正橢円形
2	C-2	1.650	1.260	0.370	不正円形
3	D-2	1.210	1.130	0.425	不正円形
4	F-3	0.820	0.720	0.300	不正橢円形
5	F・G-2	0.780	0.740	0.200	正円形
6	F-6	1.280	0.940	0.435	不正橢円形

埋設土器		m			
No	位置	長径	短径	深度	平面形
1	C-6	0.370	0.370	0.320	正円形
2	F-5	0.300	0.300	0.140	正円形

焼土		m			
No	位置	長径	短径	深度	平面形
1	E-5	0.700	0.520	0.160	不正円形
2	C-5	1.100	0.350	0.150	不正形
3	D-4	0.700	0.390	0.230	不正長橢円形

表2 遺構出土遺物計測表 土器類 その1

住居跡出土遺物一覧表【土器類】

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	曾利IV	1住 P-371-1 373 378-1 379	
2	深鉢	曾利IV新	1住 P-348 352 355 358 359 365 368 369 375 376 377 381 382 383 386 392 D-5 P-308 313 316 328 339 342 343 1住 D-4 D-5 D-6	
3	深鉢	曾利V	1住 P-400	
4	深鉢	曾利V	1住 P-399	
5	深鉢	曾利V	1住 P-388	
6	深鉢	曾利V	1住 P-385	
7	深鉢	加曾利E	1住 P-406	
8	深鉢	加曾利E	1住 P-384	
9	深鉢	加曾利E	1住 P-361	
10	深鉢	加曾利E	1住 P-408 409	
11	深鉢	加曾利B	1住 P-351	

石器出土遺物一覧表【土器類】

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	中期末～後期	1配 P-7 C-6	
2	深鉢	中期末～後期	1配 P-8	
3	深鉢	称名寺I古	1配 P-2 3 4	
4	深鉢	称名寺I古	1配 P-5	

第1号土坑出土遺物一覧表【土器類】

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	加曾利E3	1土 P-6 7	
2	深鉢	曾利IV	1土 P-4	
3	深鉢	曾利V	1土	
4	深鉢	曾利V	1土 P-10	
5	深鉢	曾利V	1土 P-5	
6	深鉢	曾利V	1土 P-17 C-5	
7	深鉢	加曾利E	1土 P-15	

第2号土坑出土遺物一覧表【土器類】

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	曾利IV	2土 P-1	
2	深鉢	曾利V	2土 P-8	
3	深鉢	曾利V	2土 P-4	
4	深鉢	曾利V	2土	
5	深鉢	曾利V	2土 P-6	
6	深鉢	加曾利E4	2土 P-2 D-3	

第3号土坑出土遺物一覧表【土器類】

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	曾利IV	3土 P-2	
2	深鉢	曾利V	3土	
3	深鉢	曾利V	3土 P-1	
4	深鉢	曾利V	3土 P-3	
5	深鉢	曾利V	3土	
6	深鉢	曾利V	3土	

表3 造構出土遺物計測表 土器類 その2

第4号土坑出土遺物一覧表【土器類】

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	鹿籠B	4土 P-1 4	
2	深鉢	曾利IV	4土 P-5-1 P-5-2	
3	深鉢	曾利IV	4土 P-5-3	
4	深鉢	加曾利E4	4土 P-5-4	
5	深鉢	加曾利E4	4土 P-11	
6	深鉢	称名寺I古	4土 P-7	

第6号土坑出土遺物一覧表【土器類】

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	曾利II	6土	
2	深鉢	曾利IV	6土 P-3	
3	深鉢	加曾利E4	6土	
4	深鉢	加曾利E4	6土	
5	深鉢	称名寺	6土 P-5	
6	深鉢	称名寺	6土	

第1号埋設土器

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	称名寺I	1埋ガメ	

第2号埋設土器

No	器種	時期	注記番号	備考
1	深鉢	曾利IV	2埋ガメ P-1 3 4 5 6 8 9 10 11 12	

表4 遺構出土遺物計測表 石器類

柱窓出土遺物一覧表【石器類】

No	種別	長さ	幅	厚	重量	石材	注記番号	備考
1	磨石	9.70	7.90	7.60	706.10	砂岩	1住 S-10	
2	磨石	13.40	9.10	5.90	985.50	安山岩	1住 S-13	
3	磨石	11.25	8.68	5.20	692.90	砂岩	1住 S-11	
4	磨石	7.30	5.40	4.30	206.80	砂岩	1住 S-12	
5	磨石	6.00	12.30	5.40	849.60	アバタイト	1住 S-14	
6	磨石	12.15	9.85	8.20	1426.80	花崗岩	1住 S-6	
7	磨石	11.80	7.05	7.55	758.80	花崗岩	1住 S-5	
8	磨石	5.30	5.10	3.65	132.30	砂岩	1住 S	
9	磨石	5.10	5.70	4.40	167.20	砂岩	1住 S-9	
10	磨石	3.75	3.48	3.00	52.10	砂岩	1住 S-7	

cm・g

配石出土遺物一覧表【石器類】

No	種別	長さ	幅	厚	重量	石材	注記番号	備考
1	磨石	8.90	7.85	6.00	578.50	安山岩	1配 S-2	
2	磨石	9.30	3.75	4.40	181.20	凝灰角礫岩	1配 S-1	

cm・g

第1号七坑出土遺物一覧表【石器類】

No	種別	長さ	幅	厚	重量	石材	注記番号	備考
1	磨石	6.00	7.10	3.40	159.40	安山岩	1土 S-10	
2	磨石	10.40	6.90	3.10	419.90	砂岩	1土 S	
3	フレイク	9.55	6.40	2.65	179.30	砂岩	1土 S-6	

cm・g

第2号七坑出土遺物一覧表【石器類】

No	種別	長さ	幅	厚	重量	石材	注記番号	備考
1	磨石	8.50	5.28	3.80	230.90	凝灰角礫岩	2土	
2	磨石	7.78	6.55	4.35	283.70	凝灰角礫岩	2土 S-3	
3	自然石	5.50	4.20	3.30	87.60	安山岩	2土 S-8	

cm・g

第3号土坑出土遺物一覧表【石器類】

No	種別	長さ	幅	厚	重量	石材	注記番号	備考
1	磨石	10.50	4.45	3.50	260.70	砂岩	3土 S-1	

cm・g

第4号土坑出土遺物一覧表【石器類】

No	種別	長さ	幅	厚	重量	石材	注記番号	備考
1	磨石	10.00	7.10	5.00	483.50	砂岩	4土 S-2	
2	磨石	8.30	6.20	3.05	212.50	凝灰岩	4土 S-4	
3	磨石	6.65	6.00	4.60	255.10	花崗岩	4土 S-5	
4	円磨盤	4.80	4.70	2.90	80.20	砂岩	4土 S-3	
5	円磨盤	3.65	2.50	2.00	23.00	砂岩	4土 S-1	

cm・g

第5号土坑出土遺物一覧表【石器類】

No	種別	長さ	幅	厚	重量	石材	注記番号	備考
1	磨石	7.25	5.80	3.30	192.40	砂岩	6土 S-1	

cm・g

表5 遺構外出土遺物計測表 土器・土製品 その1

遺構外出土遺物一覧表【土器・土製品】				
No	出土グリッド	器種	時期	注記番号
1	D-3	深鉢	早期	D-3
2	D-3	深鉢	早期	D-3
3	F-4	深鉢	五領ヶ台	F-4
4	A-3	深鉢	曾利II~III	A-3
5	A-3	深鉢	曾利II~III	A-3
6	E-3	深鉢	曾利II~III	E-3
7	F-2	深鉢	曾利III	F-2
8	D-4	深鉢	曾利III	D-4
9	C-6	深鉢	曾利III	C-6
10	B-5・C-6	深鉢	曾利III	B-5 C-6
11	B-4	深鉢	曾利IV	B-4
12	E-4	深鉢	曾利IV	E-4
13	B-2	深鉢	曾利IV	B-2
14	C-2	深鉢	曾利IV	C-2
15	F-4	深鉢	曾利IV	F-4
16	B-4	深鉢	曾利IV	B-4
17	B-4	深鉢	曾利IV	B-4
18	E-3・E-4	深鉢	曾利IV	E-3 E-4
19	E-4	深鉢	曾利IV	E-4
20	A-3	深鉢	曾利IV	A-3
21	B-4	深鉢	曾利IV	B-4
22	B-4	深鉢	曾利IV	B-4
23	D-2・F-1	深鉢	曾利IV末	D-2 F-1
24	F-2	深鉢	曾利IV~V	F-2
25	F-3	深鉢	曾利V	F-3
26	D-5	深鉢	曾利V	D-5
27	A-4	深鉢	曾利V	A-4
28	C-3	深鉢	曾利V	C-3
29	C-3	深鉢	曾利V	C-3
30	C-3	深鉢	曾利V	C-3
31	B-3	深鉢	曾利V	B-3
32	D-2	深鉢	曾利V	D-2
33	B-4	深鉢	曾利V	B-4
34	A-4	深鉢	曾利V	A-4
35	B-3	深鉢	曾利V	B-3
36	A-3	深鉢	曾利V	A-3
37	B-4	深鉢	曾利V	B-4
38	B-4	深鉢	曾利V	B-4
39	B-4	深鉢	曾利V	B-4
40	B-1	深鉢	曾利V	B-1
41	B-2・B-4	深鉢	曾利V	B-2 B-4
42	A-3	深鉢	曾利V	A-3
43	A-3	深鉢	曾利V	A-3
44	A-4	深鉢	曾利V	A-4
45	B-4	深鉢	曾利V	B-4
46	D-3	深鉢	曾利V	D-2
47	B-2	深鉢	曾利V	B-4
48	C-3	深鉢	曾利V	C-3
49	A-4	深鉢	曾利V	A-4
50	A-4	深鉢	曾利V	A-4
51	A-4・B-4	深鉢	曾利V	A-4 B-4
52	C-3	深鉢	曾利V	C-3
53	A-5	深鉢	曾利V	A-5
54	A-3	深鉢	曾利V	A-3

表6 遺構外出土遺物計測表 土器・土製品 その2

55	A-1	深鉢	曾利V	A-1	
56	B-4	深鉢	曾利V	B-4	
57	B-4	深鉢	曾利V	B-4	
58	C-3・D-3	深鉢	曾利V	C-3 D-3	
59	C-3・D-3	深鉢	曾利V	C-3 D-3	
60	G-1	深鉢	曾利V古	G-1	
61	E-1	深鉢	曾利V古	E-1	
62	D-3	深鉢	曾利V古	D-3	
63	D-2	深鉢	中期末	D-2	
64	D-2・D-3	深鉢	中期末	D-2 D-3	
65	A-5	深鉢	加曾利E	A-5	
66	A-3	深鉢	加曾利E	A-3	
67	B-5	深鉢	加曾利E	B-5	
68	A-5	深鉢	加曾利E	A-5	
69	C-2	深鉢	加曾利E	C-2	
70	C-2	深鉢	加曾利E	C-2	
71	F-5	深鉢	加曾利E	F-5 P-8 P-9 P-11 P-12	
72	A-3	深鉢	加曾利E	A-3	
73	B-4	深鉢	加曾利E	B-4	
74	C-2	深鉢	加曾利E	C-2	
75	C-2	深鉢	加曾利E	C-2	
76	D-3	深鉢	加曾利E	D-3	
77	B-5	深鉢	加曾利E	B-5	
78	C-5	深鉢	加曾利E	C-5	
79	A-1	深鉢	加曾利E	A-1	
80	B-4	深鉢	加曾利E	B-4	
81	D-3	深鉢	加曾利E	D-3	
82	D-2	深鉢	加曾利E	D-2	
83	B-3	深鉢	加曾利E	B-3	
84	E-4	深鉢	加曾利E	E-4	
85	A-4	深鉢	加曾利E	A-4	
86	A-3	深鉢	加曾利E	A-3	
87	A-3	深鉢	加曾利E	A-3	
88	B-4	深鉢	加曾利E	B-4	
89	B-4	深鉢	加曾利E	B-4	
90	B-4	深鉢	加曾利E	B-4	
91	B-4	深鉢	加曾利E	B-4	
92	B-4	深鉢	加曾利E	B-4	
93	B-5	深鉢	加曾利E	B-5	
94	E-2	深鉢	加曾利E 3~4	E-2	
95	B-4	深鉢	加曾利E 4	B-4	
96	F-2	深鉢	加曾利E 4	F-2	
97	F-4	深鉢	加曾利E 4	F-4	
98	A-4・A-5	深鉢	加曾利E 4	A-4 A-5	
99	F-5	深鉢	称名寺	F-5 P-28	
100	C-3	鉢	称名寺	C-3	
101	C-5	鉢	称名寺	C-5	
102	B-5	深鉢	称名寺 I	B-5	
103	A-4	深鉢	称名寺 I	A-4	
104	B-4	深鉢	称名寺 I	B-4	
105	C-3	深鉢	称名寺 I	C-3	
106	B-3	深鉢	称名寺 I	B-3	
107	B-3	深鉢	称名寺 I	B-3	
108	B-4	深鉢	称名寺 I	B-4	
109	B-2	深鉢	称名寺 I	B-2	
110	B-4	深鉢	称名寺 I	B-4	

表7 遺構外出土遺物計測表 土器・土製品 その3

111	B - 4	深鉢	称名寺Ⅱ	B - 4	
112	B - 3	深鉢	称名寺Ⅱ	B - 3	
113	B - 3	深鉢	称名寺Ⅱ	B - 3	
114	B - 4	深鉢	堀之内Ⅰ	B - 4	
115	B - 4	深鉢	堀之内Ⅰ	B - 4	
116	B - 4	深鉢	堀之内Ⅰ	B - 4	

遺構外出土遺物一覧表【土製品】

No	出土グリッド	縦	cm · g			注記番号	備考
			横	厚	重量		
1	—	6.30	6.50	1.10	65.00	表探	表探
2	C - 5	4.70	5.00	1.25	35.50	C - 5	
3	D - 5	4.35	4.30	0.95	21.40	D - 5	
4	F - 2	4.00	4.05	1.20	23.20	F - 2	
5	C - 2	4.05	3.70	1.05	19.00	C - 2	
6	E - 2	3.50	3.70	1.50	26.10	E - 2	
7	D - 3	3.90	3.80	1.20	20.30	D - 3	
8	C - 5	3.50	3.60	1.00	15.40	C - 5 P - 142	
9	B - 4	3.55	3.80	0.90	13.00	B - 4	
10	A - 4	2.40	3.90	0.75	8.40	A - 4	
11	C - 5	4.20	4.10	1.15	23.60	C - 5	
12	B - 3	4.05	4.30	1.15	25.90	B - 3	
13	E - 2	3.45	4.00	1.05	20.90	E - 2	
14	—	3.90	3.75	1.00	18.40	表探	表探

遺構外出土遺物一覧表【土製片疊】

No	出土グリッド	縦	横	厚	重量	注記番号	備考
1	E - 2	4.90	4.20	1.00	25.70	E - 2	

表 8 遺構外出土遺物計測表 石器類

遺構外出土遺物一覧表【石器類】

cm・g

No	出土グリッド	種別	長さ	幅	厚	重量	石材	注記番号	備考
1	C-5	磨石	6.00	5.15	3.50	154.90	砂岩	C-5 S-11	
2	D-5	磨石	4.80	4.20	3.70	105.30	花崗岩	D-5 S-20	
3	A-4	磨石	13.10	6.25	4.30	573.80	安山岩	A-4 S	
4	D-5	磨石	9.80	7.20	3.30	334.20	砂岩	D-5 S-18	
5	B-3	磨石	10.08	6.70	4.50	456.20	凝灰角巖岩	B-3	
6	C-5	磨石	6.50	9.40	5.30	431.40	砂岩	C-5 S-10	
7	B-3	磨石	5.70	8.35	4.60	318.70	砂岩	B-3	
8	E-2	磨石	6.90	7.60	6.65	482.00	砂岩	E-2	
9	D-3	磨石	6.10	8.05	6.85	663.40	砂岩	D-3 S	
10	B-1	磨石	5.70	7.40	3.90	237.90	凝灰角巖岩	B-1 S	
11	D-2	擦器	7.70	7.00	3.80	229.80	砂岩	D-2	
12	E-2	磨石	6.50	5.80	4.40	223.60	花崗岩	E-5 S-15	
13	C-5	磨石	5.30	5.10	3.90	154.90	砂岩	C-5 S-12	
14	E-4	磨石	5.70	6.75	3.70	198.90	花崗岩	E-4 S-4	
15	D-4	磨石	4.20	7.75	3.85	183.20	花崗岩	D-4 S-6	
16	D-2	打製石斧	10.40	5.45	2.25	127.90	粘板岩	D-2	
17	B-1	打製石斧	6.60	3.70	1.28	48.00	粘板岩	B-1	
18	E-1	石匙	6.30	7.75	1.50	59.30	砂岩	E-1	
19	E-5	石鏟	1.70	1.60	0.25	0.70	黑曜石	E-5	
20	D-4	石鏟	2.00	1.00	0.55	0.90	黑曜石	D-4	
21	B-1	石鏟	1.60	1.25	0.30	0.40	黑曜石	B-1	
22	C-2	石鏟	1.65	1.25	0.40	0.80	黑曜石	C-2	
23	D-5	石鏟	1.80	1.35	0.50	0.70	黑曜石	D-5	
24	D-3	石鏟	1.90	1.40	0.45	0.60	黑曜石	D-3	
25	E-6	石鏟	2.10	1.80	0.35	0.80	黑曜石	E-6	
26	D-3	石鏟	2.30	1.50	0.50	0.90	黑曜石	E-3	
27	F-2	石鏟	2.00	1.65	0.50	1.00	黑曜石	D-2	
28	D-3	石鏟	1.10	1.10	0.40	0.20	黑曜石	D-3	
29	A-4	R F	2.90	1.40	0.30	1.30	黑曜石	A-4	
30	A-5	R F	3.80	1.65	0.55	3.20	黑曜石	A-5	
31	D-3	R F	1.90	1.45	0.35	0.90	黑曜石	D-3	
32	F-4	R F	3.10	1.95	0.70	3.40	黑曜石	F-4	
33	D-6	R F	2.00	1.20	0.20	0.60	黑曜石	D-6	
34	F-3	R F	2.30	1.90	0.50	2.70	黑曜石	F-3	

第5章 自然化学分析

第1節 西桂町宮の前遺跡での黒曜石産地分析

分析の目的と方法

宮の前遺跡から総点数632点、総重量814.7gの黒曜石製石器類（石器・剥片・碎片・石核・原石などを含む）が出土した。これらは、縄文時代中期末（曾利IV・V式）から後期初頭（称名寺式）の土器群に伴う資料である。その資料を観察したところ、肉眼で信州産以外の産地の可能性のあるものが散見された。そこで、その産地の推定分析を行った。まず、保坂が黒曜石製石器類を全点観察し、信州産以外と思われる資料を抽出する。保坂はこれまでに、旧石器時代遺跡である高根町丘の公園第1・2遺跡、富沢町天神堂遺跡の黒曜石産地の全点分析を経験している（保坂・望月・池谷2001）。また、縄文時代遺跡では大月市塩瀬下原遺跡（第4次）の黒曜石産地分析の資料抽出作業に関わった経験がある。伊豆天城柏崎群は不透明で濃緑色～灰緑色であり夾雜物を含まないもの、神津島恩馳島群は不透明の青みのある黒灰色で白色の小粒子が多く入るといった認識を持っている。また、箱根産については畠宿のものについて、不透明・漆黒色で夾雜物が多く入り、信州産の不透明・漆黒色のものと比べて粗悪質という認識を持つ。こうした経験から、信州産とそれ以外とに分離した。信州産のものは、黒色のシマと透明部分とが混ざりあうもの、不透明・漆黒のものなどが中心であり、容易に分類できた。

抽出した資料は7点である。これを、沼津高等専門学校の望月明彦氏に依頼して産地分析していただいた。螢光X線分析で、分析法については塩瀬下原遺跡（第4次調査）を参照されたい（望月2001）。

分析の結果

その結果、別表のように7点すべてが信州産以外のものであり、天城柏崎群1点、神津島恩馳島群7点であった。天城柏崎群のNo. 2は楔形石器と思われるもので、重さ2.7g。神津島恩馳島群の内、No. 6 (1.3g) が石錐、No. 3 (2.9g)・No. 5 (4.8g) が楔形石器、No. 4 (3.2g) が楔形石器の破片剥片を利用した微細剝離がある剥片、No. 1 (40.5g)・No. 7 (1.2g) が剥片で、特にNo. 1は他の信州産の剥片と比べても大型である。

出土グリッドを見ると、黒曜石分布の多いD-3、D-6、E-2には分布が見られず、出土点数の比較的少ないグリッドに分布する。しかも、出土グリッドでの重量割合を見ると、B-3の73%、唯一の天城柏崎群が出土したB-5で42%、その他でも20%以上の占有率である。つまり、信州産の黒曜石が多量に集中的に分布するグリッド、信州産が少數分布するグリッド、信州産少數と神津島恩馳島群や天城柏崎群が重量割合で2割以上と高率に存在するグリッドの3種類に分類が可能である。信州産が特に多いグリッドに神津島恩馳島群や天城柏崎群が分布しない5点は重要である。黒曜石の管理・使用を原産地別に行っていたか、使用・管理の主体者が違っている可能性が指摘できる。

分析の意義

宮の前遺跡では、西桂町教育委員会の発掘資料について中性子放射化分析による黒曜石産地分析がなされている（奥水・戸村・河西・吉川1994）。縄文時代中期末の曾利式II・曾利式III・曾利式Vの3つの段階の層順についてそれぞれ10点ずつ合計30点の資料について分析がなされ、曾利式II段階で神津島1点・霧ヶ峰9点、曾利式III段階で神津島2点・霧ヶ峰7点・和田岬1点、曾利式V段階で霧ヶ峰10点のデータが報告されている。資料抽出がどのようになされたかの記載がないものの、中期末の段階で神津島産がかなりの確立で資料中に含まれていることは確認できる。一方、今回の分析で確認した天城柏崎群の資料については、1点であるがその存在が知られたことは意義深い。天城柏崎群については、旧石器時代において一定量が利用されているものの、縄文時代での利用は静岡県内においても僅少であるという。

一方、桂川流域では大月市塩瀬下原遺跡（第4次）において望月氏により螢光X線分析が行なわれ、30点の分析資料の内、諏訪星ヶ台群22点・和田鷹山群2点・蓼科冷山群2点・神津島恩馳島群3点・箱根鍛冶屋群1点と

いう結果であった。30点の資料は、黒曜石全点を対象に母岩分類の手法でグループ分けし、各母岩資料の代表資料を任意に抽出したものであり、この構成割合で資料が存在するものではない。しかし、どのような産地のものがあるかという点については網羅的であると解釈できる資料である。ここでも神津島恩馳島群が見いだされるとともに、他地域においても利用例が僅少な箱根鍛冶屋群が確認されている点注目される。さらに注目されるのは、ここでは天城柏崎群が確認されていない点である。塩瀬下原遺跡は後期中葉の堀之内式期を中心としており、宮の前遺跡より一段階新しい遺跡である。

このように、これまでの分析成果からすると、桂川流域では神津島恩馳島群が一定量利用されているとともに、箱根鍛冶屋群や天城柏崎群など原産地をひかえる静岡県を含む他地域でも僅少な黒曜石の利用が確認できることは意義深い。ひとつの可能性として、これら僅少な黒曜石については、直接出向いて採取している可能性も検討する必要がある。神津島産の黒曜石については、航海技術が必要であり、伊豆の遺跡群の集団が採取したものを持入っていたと思われ、その分配構造の解明が課題となる。強大な信州産黒曜石の分配構造との対比も視野に入れる必要がある。この2者とは別に、希少産地の直接採取という入手構造を検討する必要がある。

引用文献

- 輿水達司・戸村健児・河西学・吉川和男1994 「中部・関東地方の遺跡出土黒曜石の原産地－山梨県の遺跡に関する推定例－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第5集
 望月明彦2001 「塩瀬下原遺跡（第4次調査）出土の黒曜石製石器の産地推定」『塩瀬下原遺跡（第4次調査）』山梨県教育委員会・山梨県土木部
 保坂康夫・望月明彦・池谷信之2001 「黒曜石原産地と石材の搬入・搬出－丘の公園第2遺跡の原産地推定から－」『研究紀要』17、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

	1	2	3	4	5	6	7
A			5 10.3	26 13.7			
B		8 4.9	8 55.4	16 27.3	14 6.5		
C	1 3.6	8 6.7	11 14.5	34 16.4	17 14.0	11 8.6	
D	19 12.6	41 26.6	99 220.8	19 15.4	9 7.7	161 161.2	
E	4 3.8	12 63.6	14 15.2	11 10.8	1 0.9	2 3.4	
F		20 20.9	22 14.0	11 10.8	6 16.3		
G	6 10.2	16 18.7					
H							点数 数量(g)

図-1

判別図法・判別分析からの最終推定結果

研究室 年間通番	分析番号	グリッド番号	推定産地
MKO2-10726	MNM-1	B-3	神津島恩馳島群
MKO2-10727	MNM-2	B-5	天城柏崎群
MKO2-10728	MNM-3	C-3	神津島恩馳島群
MKO2-10729	MNM-4	F-2	神津島恩馳島群
MKO2-10730	MNM-5	F-2	神津島恩馳島群
MKO2-10731	MNM-6	F-4	神津島恩馳島群
MKO2-10732	MNM-7	F-4	神津島恩馳島群

判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

判別図 判別群	判別分析					
	判別群	第1候補産地		確率	第2候補産地	
		距離	確率		距離	確率
KZOB	KZOB	4.38	1	KZSN	53.86	0
AGKT	AGKT	1.84	1	HNKT	124.89	0
KZOB	KZOB	1.24	1	KZSN	53.21	0
KZOB	KZOB	1.87	1	KZSN	68.85	0
KZOB	KZOB	2.54	1	KZSN	49.16	0
KZOB	KZOB	7.01	1	KZSN	48.1	0
KZOB	KZOB	6.62	1	KZSN	42.74	0

表-1

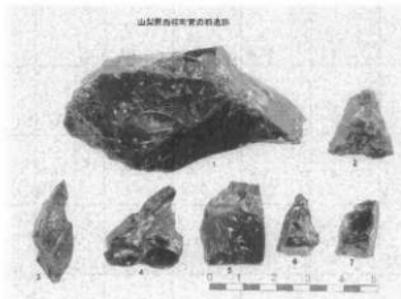


写真-1

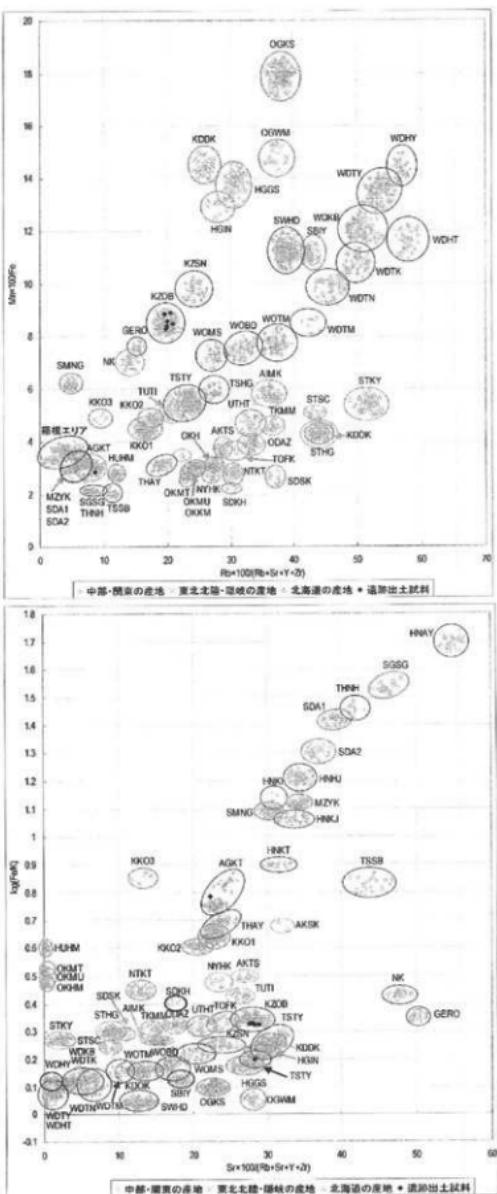


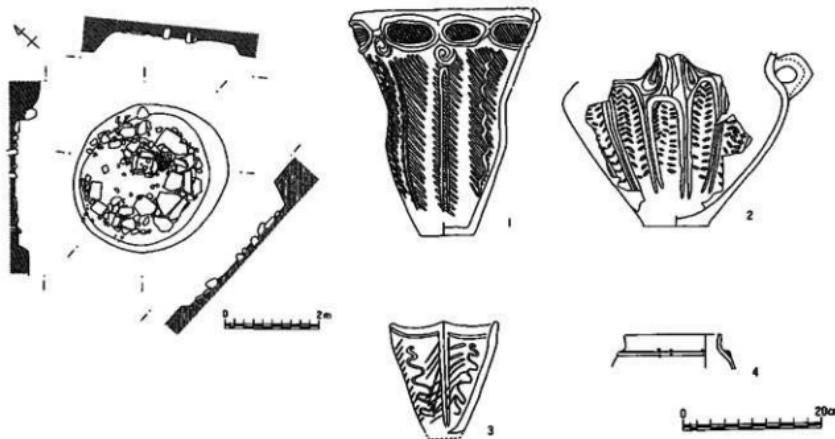
图-2

第6章 まとめ

今回の発掘調査は期間20日、調査範囲約500m²と様々な面で限定がなされていたため過去の調査から蓄積されてきた宮の前遺跡が特徴付けられるようなデータの提供は少なかった。しかしながら、欄干川近くのいわゆる遺跡縁辺部の一端を覗き見ることが出来た。ここでは主要遺構である柄鏡型敷石住居跡と配石遺構について若干のまとめと当該地への火山灰の降下および溶岩流の流下についての説明を行ってみたい。

第1節 柄鏡型敷石住居跡

本調査では1軒の柄鏡型敷石住居が確認された。居住部の東半分は削平され、さらに壁部の検出も出来ず必ずしも良好な検出状況とは言えないものであった。構築時期については、現段階では縄文時代中期後半曾利IV式期の新段階からV期古段階と幅を持たせておくしかないようである。本遺跡のある桂川流域において柄鏡型敷石住居は昭和62年度調査の宮の前遺跡の他、都留市中谷遺跡・同尾尻原遺跡・大月市大月遺跡・同塩瀬下原遺跡・上野原町孤原遺跡など多くの遺跡から確認例が報告されている。これらの報告では、その多くが縄文時代中期末に位置付けられるようである。しかし、昭和62年調査の宮の前遺跡第1号住居跡は中期後半代に構築年代が求められ初源期の次時期に比定される県内でも最古級に置かれている。



第34図 昭和62年調査第1号住居跡および出土遺物

第2節 配石遺構

遺跡のある桂川流域は上記の敷石住居跡とともに配石遺構の多くみられる地域である。縄文時代中期後半以降、都留市牛石遺跡の大環状配石遺構を代表とし中谷遺跡・大月市大月遺跡・塩瀬下原遺跡などが知られている。

今回の調査では、調査区北東隅のC-6区より1基の配石遺構が検出された。しかしながら遺構の全容をすべて検出できたわけではなく、本体部分は調査区外に延びている可能性が大きい。付帯設備として埋設土器を携えていると捉えるならば、これが最大の特徴を持つ事となろう。

土器が埋設されている配石としては県内においては、鹿嶋市後田遺跡C区二号配石が思い浮かぶ。昭和63年に調査され、東西および南北方向に約8mの拡がりを有し、中央には約4m四方の空間を持つ。また、北と南西部分より直線に延びる張り出しがみられる。土器は12個体もの縄文時代中期後半代曾利式期深鉢形土器が点在し確認されている。形態的には大月市塩瀬下原遺跡第13号配石に類似するものである。しかしながら宮の前遺跡で検出されたものとは大きく形態が違うように感じ、設置されている土器も縄文時代後期初頭称名寺式期深鉢形土器と時期差もみられる。さらに、形態で類似したものを探し出すとすると、桂川流域では昭和54年度調査の都留市中谷遺跡二地区Ⅶ層中配石があげられ、縄文時代後期中葉に位置付けられるものである。また、昭和62年調査の宮の前遺跡では礫の配置状況に規則性の無いとみられる小規模な埋設土器を伴う配石が検出されている。この時期は、今回出土の土器と正に同時期である称名寺式期に比定されるものである。

西桂町誌では、配石遺構の性格が縄文時代早期に小礫の火熱を利用して食物調理をした施設、中期後半から後期初頭に立石などを中心に構築された祭祀施設、後・晩期に土壙墓や石棺墓を伴って構築された先祖崇拝的な祭祀施設の3種に分類されている。これに照らし合わせるならば、今回の調査で検出された配石遺構は称名寺I式期に位置付けられるため中期後半から後期初頭の範疇に括られるものといえよう。

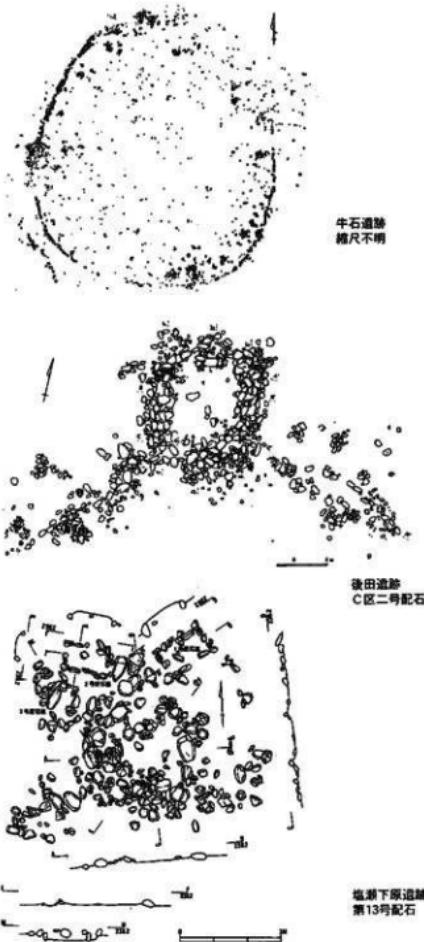
第3節 火山灰の降下

都留・西桂方面の火山灰降下による堆積については都留市史および西桂町誌に詳しい。

現在のところ、14~15万年前まで、長期に渡って温暖であった気候が変化を見せ始めた約8万年前に富士山が誕生したと考えられている。ちなみに当該期は木曾御嶽山が大爆発をし山梨県内はもとより関東一帯に大量の軽石を降下させている（木曾御嶽第1軽石層・P M 1）。

富士山の造山活動は誕生から現代まで大きく古富士火山前期・後期・新富士火山期の3期に分かれている。古富士火山前期は8~6.6万年前の時期に後期は6.6~1万年前にあたる。ちなみに後期は最終氷河期となる。今回の調査で確認できた火山灰層はこのあと的新富士火山期に噴出したものである。この新富士火山期はさらにⅠからⅢ期に細分されている。

I期は10000から3200年前にあてはまり、全国に海水の進入（縄文海進）があった時期であり、富士山では大規模な溶岩の流出と小規模なテフラの噴出がみられる。気候は大変に温暖であったと推測される。



第35図 配石

II期は、3200年前から西暦1707年（宝永の大噴火）までと捉えられている。この時期には縄文時代後期の大爆発・気候悪化・小海退・弥生期の小海進があり、間冰期から氷期へと移行する動きが見受けられる。富士山では中規模な溶岩の流出や中・小規模の火砕流や火山泥流が発生している。西桂町誌などで縄文時代中期後半・曾利Ⅲ式期に降下したとされ、今回の調査においても観察された火山灰層は同期のものと考えている。

1707年から現代までをIII期という。1707年の宝永の大噴火は富士山始まって以来というものであった。この噴火では、はじめて軽石を噴出させている。

第4節 泥流・溶岩流の流下

古富士火山は数度に渡って火砕流・泥流・溶岩流などを流出している。ここでは西桂地域に影響を与えたものについて紹介したいと思う。

1. 古富士泥流

古富士泥流は概略1.76万年ほど前に流れたものと見積もられている。もともと、富士山から火砕流として発生したもののが、桂川方向に流下したおりに泥流となって激しく桂川渓谷を駆け下ったものと考えられる。この泥流は西桂はもとより、都留から大月と下り神奈川県厚木市にまで達している。この到達距離からみても非常に大規模な泥流であったことが理解できる。

2. 猿橋溶岩流

約8500年前に富士山頂近くより流出した大規模な溶岩流である。古富士泥流が富士吉田市と西桂町との境界あたりの丘陵に衝突した影響で柄干川から柄杓流川寄りの北側に流路を取らざるを得なくなる。このため、猿橋溶岩流は南側に流路を取っている。大月市の猿橋地区にまで流下したため、せき止められた桂川の支流などに堰き止め湖が出来、植物の繁茂により人はもとより動物の宝庫となっていたようであり、人口密度も上昇してようである。

3. 桂溶岩流

約8500～7700年前に流出した溶岩流である。この年代からみると前述の猿橋溶岩流とさほど時間を置かずに流下したものといえる。流下は猿橋溶岩流を迂回するようなコースを取ったために古富士泥流と同じ北側を通って都留市十日市場地区まで埋め尽くしてしまっている。西桂町誌によると宮の前遺跡のある下暮地地区の一部分（浅間諏訪神社・仏眼寺北側下方から柄杓流川方向）の地形に添って溶岩流が入り込んでいることが分かる。猿橋溶岩流と桂溶岩流によって桂川渓谷は埋まってしまい、桂川水系が全て堰き止められてしまい湖が出現した。しかしながら、富士山系などから流れてくる水は多く、この湖からオーバーフローし双方の溶岩流を削り、蒼竜峠や田原の滝などを作り出したのである。

4. その他の溶岩流

桂溶岩流以降、西桂を覆うような溶岩流は確認されていないが、弥生時代末期～古墳時代初頭（約1700年前）に富士吉田市の暮地の坂で止まった楓丸尾第1溶岩流と西暦937年頃に富士吉田市富士小学校辺りに末端崖を作った後、止まり切らなかった溶岩が二次的に流出した劍丸尾第1溶岩流があり、西桂地区に迫ったことが確認されている。

【参考文献】

『西桂町誌』資料編第一巻 自然地質原始・古代 西桂町 2000

『都留市史』資料編 地史・考古 都留市 1986

『山梨の地質』山梨地学会 <http://www.kaied.jp/ysimura/index.html>

『富士山の地学』相原 淳 <http://www2s.biglobe.ne.jp/~aaihara/volcanofuji.htm>

写 真 図 版



調査地より富士山を望む



調査地より見る三ッ峰



完掘状況

写真 2



調査前の状況



調査終了後の埋めもどし風景



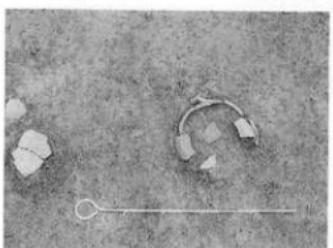
敷石住居跡



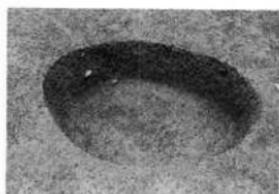
配石造構



第1号埋設土器



第2号埋設土器 検出状況



第2号土坑

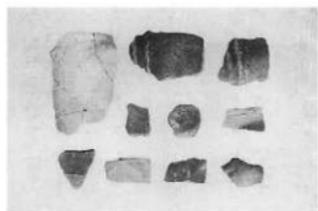


第3号土坑



第4・5号土坑

写真 3



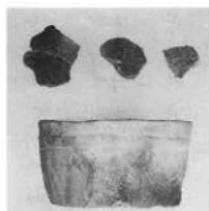
石住居跡 出土遺物 その1



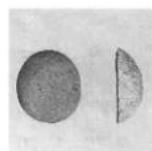
石住居跡 出土遺物 その2



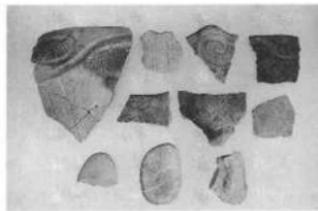
石住居跡 出土遺物 その3



石住居跡 出土遺物 その1



石造構 出土遺物 その2



1号土坑 出土遺物



2号土坑 出土遺物



3号土坑 出土遺物



4号土坑 出土遺物



5号土坑 出土遺物



1号埋設土器



2号埋設土器



遺構外
出土遺物
早期



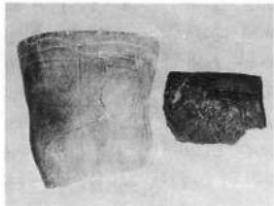
遺構外
出土遺物
五領ヶ台



遺構外出遺物
曾利IV



遺構外出土遺物 曾利IV～V



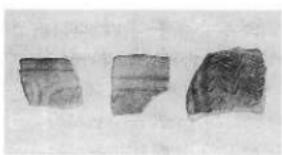
遺構外出土遺物 曾利V その1



遺構外出土遺物 曾利V その2



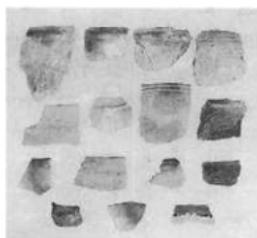
遺構外出土遺物 曾利V その3



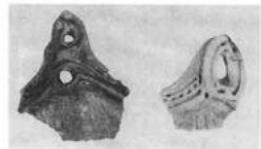
遺構外出土遺物 曾利V古



遺構外出土遺物 称名寺 I



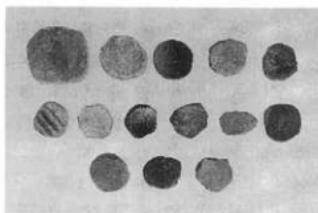
遺構外出土遺物 加曾利E



遺構外出土遺物 称名寺 鉢



遺構外出土遺物 称名寺 II



遺構外出土遺物 土製円盤



遺構外出土遺物 土製片鐘



遺構外出土遺物 磨石 他



遺構外出土遺物 石錐



遺構外出土遺物 R.F.



遺構外出土遺物 黒曜石

報告書抄録

ふりがな	みやのまえいせき							
書名	宮の前遺跡							
副書名	桂川流域下水道西桂町下暮地発進基地建設に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第207集							
編著者名	吉岡弘樹・齊藤伸・保坂康夫・望月明彦							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 055-266-3016							
発行年月日	2003年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	新北緯	新東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
みやのまえ いせき 宮の前遺跡	みなみつる ぐんにしか つらまちし もくれち 南都留郡西 桂町下暮地 720-1 他	市町村 遺跡番号	19423 4230009	35° 31° 42°	138° 50° 42°	2002年 5月10日 ～ 6月17日	506	桂川流域下水道西桂 町下暮地発進基地建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宮の前遺跡	集落	縄文時代 中期後半・ 後期	柄鏡型敷石住居跡1軒・ 配石遺構1基・土坑6基・ 埋設土器2基・焼土址3基	縄文式土器(曾利式期・称 名寺式期・他) 石器類 他				

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第207集

宮の前遺跡

-桂川流域下水道西桂町下暮地発進基地建設に伴う発掘調査-

印刷日 平成15年3月10日

発行日 平成15年3月20日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会・山梨県土木部

印刷所 株式会社 峠南堂印刷所

